

社寺建築 及臺灣檜材の安價提供
設計監督

(三年以上水蓄乾燥材)

當所は社寺建築改善の目的を以て臺灣總督府及内務文部兩省の了解の下に臺灣檜材の安價提供及工事の設計又は監督の御依頼に應じ可申候間工事の大小に拘らず左記御便宜の個所へ御相談被下度候追て設計規程並に目安表又は臺灣檜木質見本等御入用の向は御申越次第呈上仕候

(充分なる水蓄乾燥をなしたる檜材最も優良なるも水蓄不充分的なる檜材は干割狂ひ等の缺陷多きものであります)

東京市四谷區霞ヶ岡町十六番地
(明治神宮外苑内日本青年館正門前)

社寺工務所
(電話青山六〇二八番)

神奈川縣 鶴見町

社寺工務所鶴見支所

福岡市外堅箱町馬出松原

社寺工務所福岡支所
(電話二二三〇番)

大阪市西區市岡町七十九番地

社寺工務所大阪支所
(電話西三二二四番)

- 臺灣檜材六特資
- 一、耐久防腐
 - 二、蟻害絶無
 - 三、香氣清楚
 - 四、木質堅緻
 - 五、理整然木
 - 六、木高稚包

統一價定	
一ヶ年	金壹圓貳拾錢
一ヶ年	金貳圓貳拾錢
送料共	送料共
前金之	前金之

統一廣告料	
表紙一頁	金貳拾圓
一頁	金拾圓
一頁	金九圓
一頁	金五圓
前金之	前金之

昭和四年四月廿四日印刷納本
昭和四年五月一日發行
(第四百十號)

不許複製

編輯兼發行人 小林順義
印刷所 東京府在原郡品川町南品川百八十二番地
印刷所 都印刷所
電話高輪六〇二四番

發行所 統一發行所
東京府在原郡品川町南品川四百十二番地
東京電話五一〇七一番

編輯事務ハ發行所ニテ取扱フ

目次

所感	本多日生
祖書五大部の綜合觀	本多日生
記事	
○知法思國會大會	
○清明會講演會	
○小松川開堂供養	
各地教報	

第三十四年六月號



所 感

大僧正 本 多 日 生

今回我が統一閣に於ける第二、第四日曜の講演會を復活することに相成つて、本日はその第一回講演會を催した次第である。從來第二日曜は、東京の顯本法華宗内寺院の僧侶諸師にこの一日を提供したのである、然るにそれが緩漫の有様に陥つて遂に休止するに至つた、第四日曜はこれを統一閣に所屬して居る信徒諸氏に一日を提供して、それ等の人に依つて適當なる講演會を開かれるやうに、第一と第三日曜は私が單獨で擔任して、如何なる用事があらうとも缺席なく勤めるからといふことを、前年定めたのである。その後第一、第三の日曜は自分の擔任した通りに繼續して參つて居るのであるけれども、第二と第四日曜の講演會は何時の頃からか自然消滅の

やうな事になつた。これは其だ残念な事であつたので、そこで是非これを復活して貰ひたいといふ要求が起つたのであるが、十分の決心と準備とを持たなかつたならば、又中絶するやうな悲運に際會しないとも言へないのである。それ故に今度は第二、第四の日曜講演の繼續出來るやうに、特に熱心なる青年僧俗の人達と話合つて、本日はそれ等の人が一種の鞏固なる宣誓、盟約を結んだのである。それ故に只今までいろ／＼話された事は、何れも各自の固き決心の心持を表白せられた次第である。

この特に熱心なる人達が誓約を致したその内容はこれを天下に公表して少しも差支のない事柄である即ち、

を遂げるのである。

聖賢の教を見てもその事を最もやかましく言うて居るのであつて、即ち聖人の傳へたる道といふものは「人心惟危、道心惟微」なり、惟れ精惟一、允に其の中を執る」と申して居るのである、人間の心には濁つたやうな墮落する精神がある、それが割合に旺盛に働くからそれを制御して、さうして高き道德的精神は微になるからそれを引立て、行く、この一點に集中して、惟れ精惟一といつて之を本當に磨き上げない限りには、萬事はうまく行くものではないといふことが聖賢の道である。無論この聖賢の教から出て政治もあり、経済もあり、人生の生活といふものは無論心配して居るので、仁政を施すといふことは古今一貫して居ることであるけれども、その仁政を施す基礎に明教を興へることが根本の問題になるのである。故に孔子は論語の初めに明かに示して居るのである。

之を導くに政を以てし、之を齎ふるに刑を以てすれば、民免れて耻なし、之を道くに徳を以てし、之を齎ふるに禮を以てすれば、耻ありて且つ格る。

これが現代を最も能く教へて居ることである。國民を齎るといふのは所謂教化して行くのである、それを道德的の教化を以て行きさへしたならば、人間は自分に反省をして耻づべきは耻ぢ、改むべきは改めて人格といふものが完成し、立派な人間が出来て来る。随つて社會國家が適當に發達を遂げるのである。然るに徳を輕んじて刑といふ、今の政治法律――刑罰萬能のやうな頭腦をやつて行く、民免れて耻なしで、その法律を潜る研究をして、會社の重役などでもいろ／＼不都合な行爲をして私腹を肥したりする、それでも自分は牢に行かないで済むやうな方法をうまく考へてやつて行くので、所謂免れて恥なき人間が各方面に一パイ出来て居る、さうして何

としてでも金を握つて居る奴の方が威張るといふやうなことになる。是等の忌はしい現状も、ナニも澤山の問題がある譯ではない、聖人の言を藉りて言へば、「之を道くに禮を以てすれば恥あつて且つ格る」であつて、即ち教化を重んじない限りには社會人心の向上は期せられないものである。

釋尊の教から觀たならば、釋尊自身が迦毘羅衛城の王冠を擲つて出家成道をせられたといふのは、即ち世の中を本當に導き、人間を本當に濟ふといふには、政治經濟よりも精神の内面に進んで行かなければならぬといふことを看破せられたからである。仍て成道以後五十年の説法をせられたの中には、法律經濟に關することのお話もだん／＼あるけれども、やはり中心の問題は、人間の精神を善くするところの宗教道德の感化を以て第一義として、五十年の説法、七千餘卷の一切經が出来て居る譯である。以上は東洋の方面に就て、惟神の道なり、聖賢の

學なり、佛の教なりから觀て、教化の重んずべきことを申したのであるが、歐米諸國と雖もやはり同じ關係のもので、基督教は吾々から見れば不完備な宗教であるけれども、とにかく基督の教に依つて人心を教化して來た、そこに愛を説き正義を説き、その基督の教が普及したる結果、歐米の文明は保つて來たのである。又その他にも多少の道德上の教があつて、その倫理道德の教化が及んで歐米の文明といふものは築かれて居るのである。若し歐米が單なる利權を争ふところの政治法律經濟のみであつて、基督教の教化が無かつたとするならば、今日どころではない、その幾倍の激しい墮落頹廢を來して居るか判らないのである。まだ／＼歐米は宗教が衰へたとは言つても、なか／＼強い力を以て人心教化をやつて居るのである。

斯ういふ事は今更事新しく言ふ必要はないので、人間に道德宗教の教化を除つて人が善くなるか、世

の中が善くなるか……そんな事は問題にすることは要らない、餘りに當然過ぎたことである。それが判らぬやうな者が世の中の先に立つとか、國家を経綸するとかいふことは、實に恐ろしい失態であつたのである。けれども悲しい哉、我が國に於てはまたその事がボンヤリして居る、覺醒めかけたが如く、覺醒めざるが如き状態に居る、これは眞に慨歎に堪へない事である。不肖は學足らず徳淺きものであるけれども、これほど明瞭なる誤謬は、ナニも自分の無學と不徳とに依つて遠慮することもなからう、これほどハッキリした間違ひを偉さうに見える人がやつて居るのであるから、それは警告を與へても宜からうと思ふのである。さういふ人々を一々列擧して見ても宜しいが、身分も高く榮職に在つて立派に見える人で、その人の頭腦を解剖して見たならば、さういふ大事な點に於て誤解を有つて居る人が、先づ日本の支配階級には大多數を占めて居るのである。

て國民を教育して行くといふことになれば、哲學上の思想も缺けて居れば、宗教上の信念も缺けて居れば、倫理の根柢も明かにならず、人類の理想もわからない、大事なことが四つも五つも判らないことになつて、唯だ僅かな生活上の技術、技藝を教へるやうなことに止まつてしまふ。今日我が國には學校は澤山あるけれども、倍々努力して居るのは生活の技能を養はんとするところの教育に熱中して居るのである。

又教化團體、修養團體の如きものも、それ等がどういふ趣意で出來て居るかといふことは、自分は大體承知して居るのであるが、それが皆な僻して居ると思ふ。多くの修養團體は非常な淺薄な、心學道話のやうな意味の間に合せの事でやつて行くので、一時は効果があるやうに見えるけれども、今日心學道話といふやうなものが勢力を失つた所以を研究して見たならば、人間はさういふ淺い、表面の修養を

又その中に於て一分教化の重んずべきことを知つて、教育者などが教育の大事だとか、或は世間の教化團體、修養團體に於て、人心教化の事が必要だと自覺しても、その力針が確立して居ない。又思想問題に就てもその批判の標準がハッキリして居ない。これは誠に慨かたしいことであつて、今日の學校教育の缺點を申せば、我が國の歴史的文明を體系的に維持することが出來て居ないのである。殊に大きな失態は、佛敎といふものを全然教育から斥けてしまつた、聖賢の學も殆どこれを顧みない、漢文といふやうな科目はあるけれども、それは唯だ文章として研究をするので、所謂聖賢の學といひ、聖人の道といふ尊き意味を以て研究するのではない。大體の傾向はやはり論語とか孟子とかいふものはモウ舊い役に立たぬ書物のやうに考へ、佛敎などはい、加減な怪誕不稽の事が書いてあるかのやうに考へて居る人が大多數である。それであるからさういふ頭腦を以

一時與へても、時を經過すれば皆力を失つてしまふものである。又偏つたところの教化と申すのは、國體論をやれば唯だ國體の事だけを言つて居る、天子様が有難いといつたならば天子様の事だけを言つて居る、それでは教化の完全を期することとは出來ない。一方は生活の事、經濟の事ばかり考へて居る、一方は天子様の有難い事だけを言ふといふやうなことであると、それが喰ひ違ひを生じて來る。口を開けばパンを論ずる者と、口を開けば 陛下の有難い事を言ふ者とは話が喰ひ違つて、何處まで行つてもそれではうまく行かない。それは教化の方針が整頓して居ないからである。最も明瞭にわかるのは、朝鮮人などを教化しようとするに就て考へたらスグ判る。朝鮮人は日本の新附の民であつて、同じやうに教化して日本人として適當なる生活を營ましめなければならぬが、今はだん／＼反對するやうな氣分を造つて居る。さうして朝鮮に朝鮮神宮といふや

うなものを強いて建てられたけれども、それは朝鮮人は大して喜ばない。無理やりに唯だ日本の國體を押しつけて持つて行つてもいくまいと思ふ、彼等は個人としての人格が根本的に非常に壊れて居るのであるからやはり、宗教の信念なり、一般人間としての道徳なり徳性といふものを養つて、それからだんだん日本の歴史を教へて、遂に日本の國體を敬慕するやうに導かなければならぬのに、さういふ順序といふものが攻究されて居ない、甚だ遺憾な事である。

日本の國內に於て考へても、やはり今日のいろいろの思想問題といふものに就ては、よほどその教化の方法を具備整頓してかゝらなければならぬ。最もその根柢となるものは、個人に就ても社會に就ても宗教的信念といふものが非常に大切である、モウ一つは哲學的の奥深き觀念である、サク精しい事がわからないでも、唯だ僅かな表面に現はれる科學の知識などでグラ／＼させられるやうではいけない。家

を建てるには地形といふものを確かりして置かなければならぬから、サク細かい事は知らないでも、柱の下には割栗石をしつかり入れて置くとか、或はコンクリートの基礎を造るとかして、とにかく資金は少々しかなくとも地形だけはやらなければならぬと考へなければならぬ。然るに今の日本の現状は、地形などはどうでも宜いから外部の方を出るだけ綺麗にしるといふやうなやり方であるから、少し風が吹けばその建物はグラ／＼する譯である。大體いまの日本人に對する教化の方法といふものは、即ち佛敎を侮辱することに於て、哲學的思想の根柢といふものを國民に與へない、又宗教の信念を與へない、倫理に就ても倫理の根柢と確信を與へない、斯ういふ大きな欲陥が、佛敎を侮辱して居る教化團體なり修養團體なり、教育方針なりの上には明かにある。唯だその一つばかりではない、あらゆる點に於て欲けて居ると思ふ。あまりに思想が粗雑にして、國民

を教化するだけの準備が整頓して居ない。不肖ながら吾々同志は學習と宣傳とに依つてこの國家の欲陥を補正して、萬一なりとも御奉公を致したいといふ赤誠に驅られてこの度の盟約を致した次第である。而して新様な考へは、私等自身に依つて新しく考へたことではない、日蓮聖人の御主張、御活動といふものが即ち今申す通りのことであつたのである。それ故に前年大師號追賜のことに就て吾々奏請者となつた際に、奏請文を上つたのであるが、それにはハツキリ其事が出て居るのである。是は日蓮門下の僧俗は固より苟も日蓮敬慕者の忘るべからざる事である。

日蓮聖人ハ我國歴史上ニ於ケル顯著ナル高僧ニ有之是ヲ宗教上ヨリ觀レバ慈仁深厚ノ聖者ナリ之ヲ思想上ヨリ觀レバ深遠透徹ノ學者ニシテ國民善導ノ先覺者ナリ又之ヲ國家ノ上ヨリ觀レバ熱誠ナル勤王愛國ノ國士ナリ今謹テ日蓮聖人

一代ノ主張ト經歷トヲ案ズルニ内ニハ佛敎教義ノ正統ヲ發揮シテ法華一實ノ正法ヲ宣布シ外ニハ我國文化ノ體系ヲ考察シテ神儒佛三途ノ融合ヲ鮮明ニシ三途各々ノ特色ヲ尊重スルト俱ニ相互ノ冥合ヲ期シ一天四海皆歸妙法ノ抱負ヲ懷キ之ガ爲ニ立正安國ノ主張ヲ高潮シ北條氏ノ迫害ニ遭フテ斷頭場ニ臨ムモ尙ホ立正ノ主張ト勤王ノ大義ヲ絶叫シテ止マズ其人格ノ高風ト主張ノ意義トハ國民教化ノ上ニ寄與スル所實ニ甚大ナリト信ジ候(下略)

斯ういふ奏請文の意味を御嘉納あらせられて立正大師の諡號を賜つたのである。法華經を宣傳せられるのであるけれども、唯だ單純に法華經だけを振り廻されたものではない。法華經は開顯主義であるから内は佛敎を開顯し、外は社會の文化を開顯して、理想的なる綜合統一ある文明を建設するまでの理想を有して行動せられたのである。

それ故に日蓮聖人一代の言動を考へて見るといふと、無論法華經を中心にして居られるけれども、同時に聖賢の教といふものも非常に尊崇せられて居るのである、それは御遺文の中に始終出て来る。その意味は、聖賢學の教へて居るやうな仁義忠孝の事は佛敎にもあるけれども、又佛敎は儒敎的色彩から来た一種の特色がある。我國の歴史を飾つて居るところの忠孝節義の人達、例へば元祿武士の大石良雄であるとか、或は建武中興の時の楠正成であるとか又維新の當時に於ける吉田松陰とか、近くは乃木將軍とかいふやうな人々の有して居るところの正義の氣節、氣魄といふものは、聖賢學を通して來て居るもので非常に尊いものである。

普通の坊さんは、佛敎は支那の老莊學の方から來たやうに思つて居る。老莊學の方であれば徒に大言壯語して居るのであるから、丁度佛敎の禪宗坊さんとか、老莊學の學者といふ者は、世の中に革命が維新の際にも排佛論といふものが起つた。であるから佛敎が果して此の氣節を失つて、國家の大義を辨へないやうなものになり切る位ならば、吾々は排佛論に賛成を表すかも知れない。

日蓮聖人が左様な出來損うた佛敎徒と異なるのは其の氣節風尚といふものが實に尊いのである。北條の惡逆を叱咤して自から頸の座に坐り、流し者になつてもその正義清節といふものを少しも枉げない、毅然としてこれを一貫して居る。これは佛敎の眞髓である。即ち伯夷叔齊であるとか、伍子胥であるとか、比干であるとかいふやうな、御遺文に現はれて來るところの佛敎の節義の士といふものを、日蓮聖人は崇敬して居られる。であるから現代に日蓮聖人が出て居られたならば、乃木將軍の忠誠にも感心されるであらうし、明治維新の功臣の事蹟にも感心せられて、或は彼等の人々を力協せて勤王の大業に参加せられたであらうと思ふのである。

起つて政權が覆かへつても知らん顔をして、仰向いて欠伸をして居る「あくそれは顛覆かへることもあるだらう、茶碗の覆かへるのも國の顛覆かへるのも大した違ひはあるまい」そんなものですナ」：ナンと言つて自ら高しとして居るところの風がある。その風が佛敎の坊さんの中には多量に入つて居る、それであるから日蓮聖人の時代でも、京都の皇室が勢力を失はれた時分には逸早く鎌倉にかけつけて北條幕府の御機嫌を取つてさうして武運長久を祈つた、昨日までは朝廷の寶祚萬歳を祈つた坊さんが、鎌倉に馳せ下つて北條氏の武運長久を祈るやうな事をやるから、日蓮聖人が激怒された譯である。それは佛敎をやつて居ればそんな事は出來ない。坊さんで阿彌陀經や般若心經ばかりやつて居つて、色即是空、空々寂々、ボク／＼ナンマイダー……斯うやる者は此の氣節を失つて居るのである。さういふ宗教を普及せしめて居たのではいかんといふので、明治

又神ながらの敎のことも、日蓮聖人は最も能く學び、又その精髓を發揮せられたのである。神ながらの道の大事なのは、皇室の尊嚴と國家の使命である、日本の國が尊い天職を有つて居ることである。それ故に日蓮聖人はさかんに日本々々といふことを言はれて「八萬の國にも超えたる國ぞかし」といつて國家の使命を慶讃して居るのである。

斯の如く日蓮聖人は實に遺憾なく、佛敎の中にはその精髓をとつて法華經を中心とし、佛敎に於てはその生命とする義の道徳を發揮し、伯夷叔齊の彼の淨き氣節になぞらへて終には自からも身延に隱栖され、又勤王の大義の爲めに北條と闘つて頸の座にも坐り、神ながらの精髓たる國家の使命に就ては非常な抱負を懷いて「一天四海皆歸妙法」と叫び、日本をはじめとして「日本乃至一國浮提」ととなへ、この大きな抱負を以て國民を警醒せられたといふことは、實に日蓮聖人御一人の上に、佛敎も佛敎も神道

も併せて、その精髓を體現してそれを畢生の主張とし、それを一代の活動に移された方である。その流を酌む者が、明治維新の際に來つても少しも勤王の大業に参加しなかつたといふことを、吾々は非常に遺憾に思ふのである。何故に國家にあのやうな大事件が起つて居る時分に、日蓮門下の僧俗の中から大聖人の御趣意を奉じて、この勤王の大業に参加しなかつたか、眞に遺憾千萬な事だと思ふ。

併し過ぎ去つた事は仕方がない、今また國民の思想が斯の如く動亂を來し、殆ど我國の歴史に曾て無かつたやうな大逆破國の計畫をも爲さんとする際に方つて、日蓮門下の僧俗が、他の氣節なき佛教徒と同じやうなる態度に居るといふことは、大聖人に對して如何にも相濟まぬ事だと思ふ。此の際に奮起するだけの氣節がなく、それだけの氣概が無いとするならば、日蓮門下といふやうな光榮は剝奪しなければならぬと考へる。日蓮門下の各教團にもそれ／＼

トスルニハ先づ各派ノ融合ヲ念トシ僧俗ノ異體同心ヲ重シ清新ナル時代適應ノ教化ヲ盛ニシ此好機ヲ一轉期トシテ舊來ノ陋習ヲ脱却セズン

ベアラズ

とあるのである。即ち舊來の陋習を脱却して時代適應の活動に就くことが、大師號を追賜せられた聖恩に奉答する所以だといふことを申して居る。さうして此の訓示と、當時各派管長を代表して私が捧讀したところの奉戴文の二つは、時の宮内大臣牧野伸顯氏の手を経て、攝政宮殿下の御覽觀に供し奉つた次第である。唯だ、加減にこの訓示を發したものでない、上、陛下に對し奉つても此の事を誓つて居る譯である。然るに其の後一層思想界が險惡になつて來たにも拘らず、安閑として何等爲す所がないといふことであつたならば、實に恥入る次第であらうと思ふ。當時それ／＼社會的に有力な人々も此の盛衰奉戴式に出席せられて、いろ／＼述べられて居

の人は居られる、無論吾々はそれ等の人々と協力をして行きたい爲めに、頭を下げ腰を屈して今日隱忍自重して居るのであるけれども、この國家の現狀を視て何等憤慨する所なく、起つて大聖人の御精神の下に働かうとしないならば、それは決して日蓮門下の人ではないと謂はなければならぬ。

前年大師號追賜の際に、各教團の管長が共同して同一文の訓示を各宗内に發したのである。その訓示は今なほ明かに活きて遺つて居る、どういふ事を訓示したか。今私が話しつゝあるやうな事柄を、當時各教團管長が同一文章に依つて訓示として出した、それに依れば今日決して坐視傍觀して居るとは出來ない筈である。即ちその一節に

我等立正大師門下ノ僧俗ハ愈々益々精勵シテ追賞ノ聖旨ニ奉答シ立正大師ノ遺教ヲ發揚シ以テ立正安國ノ實現ヲ期シ進ンデ理想的文化ノ建設ニ寄與セズンハアラズ而シテ此責任ヲ全ウセン

る、加藤高明氏はその祝辭に於て斯様に申して居る日蓮聖人が頗る大處に其の意見を置いて、國家民人の爲めに非常に立派な思想を懷かれ、又これを實行せられたといふ事に就きましては、大いに尊敬して居るのであります。

どうしても大處に其の意見を置くといふことでなければならぬ。今日の思想界の動搖、國家風教の頹廢といふやうな現狀に對しても、モウ少し大きく高い所から觀て、吾々日蓮門下が如何なる活動をすべきかといふ事を考へなければならぬと思ふのである。幸に今回同志として盟約を致した者は其の旨を奉じて、今後微力ながら何等かの貢獻を致したいと考へるのであつて、その第一回の講演會を開いた次第である。今後は毎月繼續して第二、第四の日曜日此の講演會を開くわけで自分も東京に居る限りは成べく出席をしたい考である、折角諸君の御來聽を希望する次第である。(拍手)

祖書五大部の綜合觀 (其一)

大僧正 本 多 日 生

祖書五大部といふのは、日蓮聖人の御遺文の中の立正安國論、開目鈔二卷、撰時鈔、報恩鈔各々二卷それから觀心本尊鈔、この五部八卷を申すのであるが、遺文録では録内の一の巻から八の巻までに編纂されて居る。この御遺文の編纂はいろいろ議論もあるけれども、弟子信者達が大型人入滅後第一周忌に集つて、御眞蹟を持寄つて編纂したと謂はれて居る。それにはいろいろ異論もあるけれども、いづれにしても録内としし四十巻編纂したのが最も正確なるものであつて、さうしてその編纂に一番權威があるといふことは誰も異存のない譯である。その録内の一から八までにこの五大部が編纂されて居るのでこれが最も重要な遺文であるといふことに就ては

これ亦誰にも異存がないことで、五大部といふ名も何時とはなしに定まつて居る。この五つの中でどれが一番善いか、どれが一番重いかといふことは容易に言へないことで、その一つの問題の上から見ても、その説く事に多少の重い軽いはあるけれども、五大部の輕重優劣といふやうなことは考へない方が宜いのである。五大部は寧ろ聯關して、互にその思想が表はれて居るものだといふ觀方が宜いと考へる。さういふ觀方は從來あまり人がして居ない、それ故にこの五大部の綜合觀といふことを話して見たいと考へるのである。

立正安國論に現れて居る御趣意は、即ち正しき教を立て、國を安らかにしなければならぬ、國家の最

も大事な礎は教である、その教を正しくしなければ健全なる國家を發達させることは出来ないといふ觀念は、これは實に古今を貫く大真理で、近頃それが大分能く認められつゝあるのである。即ち教化を重んじなければならぬと言はれて居る、その教化本位の文明といふことは、立正安國の趣旨であつて、近頃になつて日本の上下の氣附く所となつた譯である。日蓮聖人が六百數十年前にこれを道破したといふことは、實に千古の偉人である。

その安國論に現れて居るところの精神、即ち教を本にして國を盛んにして行く、そこに教の大事なこと、國を思ふ精神とが調和して行くことが大切になつて居るが、この精神は何に比べて軽いといふこととは言へない、教を大事にして國を盛んにしなければならぬといふ、この法を重んじ國を思ふどころの精神は、根本的觀念であつて、これに對して軽い重いといふやうな比較をすべきものではなからうと思

ふのである。であるから安國論に説いてあること、開目鈔に説いてあること、どつちが重いか、さういふことは餘計な議論である。そんな問題よりは五大部の間に連絡を執つて、甲の書物には詳しく出て居り、乙の方には略してあるといふことはあるけれども、互に關聯して大事なことが現れて居るのである。

即ち開目鈔に現れて居るところの主師親の絶對の三徳者、その大人格者が即ち吾々信仰の對象となるべきものである、それが即ち宇宙的の絶對者であるその宇宙の絶對的主師親の三徳者を認め得てそれを信心するといふことを中心にして説き出した開目鈔これ亦大事なもので、これと國を思ふ考とどつちが重いか輕いかといふやうなことを言つて、絶對の本佛を信する觀念と、國を愛する觀念との輕重といふやうなことは、餘り問題にする必要はないと私は思ふのである。開目鈔にある觀念はやはり安國論の

中にもある、安國論にある思想は開目鈔にもあるといふ風に互に相關聯して居るものである。

又撰時鈔に現れて居る時を撰ばなければならぬといふことも、この時を撰ぶといふことは、教はその時代に適應しなければならぬといふことである、撰時鈔などに書いてある表面の論理は五箇の五百歳といふものを擧げて、佛法の小乘、權大乘、迹門、本門といふやうな風に教が弘まつて行くといふ順序に配合せられて居るが、それだけでは「一時を知るを大法師と爲す」といふことが根本の觀念であり、合理的説明である。それは時代に依つて教の應用といふものは變つて行くものである、教の本質と人間の性質と宇宙の原理といふものには變りはない、けれどもそれが應用されて行く所には變化といふものがある。宗教は本質的には古今を貫くものであるけれども、その應用に至つては時代に適應しなければならぬといふことを、殊に日蓮聖人が強く言は

た。他の言葉を以て言へば、宗教は役に立たぬやうな化石した時代後れのものになつてはならぬ、その時代に役立つ宗教として活躍しなければならぬといふことを言つて居るのである。その觀念はまた唯だ撰時鈔に限るものではない、立正安國論を書かれる精神も、やはりその時代に役立つ宗教として活躍する爲に起ることである。

それから報恩鈔に於て報恩の道徳を説き、人間は元來報恩を以て生命としなければならぬ、況んや佛敎は報恩主義の道徳である。さうして自分の師匠の導善坊に對する師恩といふものを説かれた、師恩ばかりではない、その他一切の恩に就ての觀念を説いてあるが、これ亦他の御遺文と比べて劣るといふやうなことは言へるものではない。開目鈔で主師親を説くのも、これ即ちその恩に感激して居る言葉である、又安國論に於て法と國とを尊ぶといふのもやはり法の恩、國の恩を感ずるのであつて、報恩の觀

念といふものはどこにもズツト聯關して行く思想である、報恩の觀念を除つて安國論があるのではない安國論を除つて報恩鈔がある譯ではない。

斯ういふ次第であるから、從來の人のやうに切り離して、どつちが重い軽いといふやうな値段附けをして、これは二十錢でこれは十三錢……さういふ風なことは要らない。相互の思想の聯關を能く見て、日蓮聖人の御主張の全般を統括的に明かにして行くといふことの方が大事なことであつたのである。昔の物の觀方が下手ナンである、註釋ばかりで小さい事をゴト／＼言ふのが學問みたやうに思つて居つたから、さういふ事が起つたのである。元來日蓮聖人の學説は綜合學派であつて、「玄黄を略して駿逸を取る」といふことを標榜して居る。馬を見ても、黄い馬だ、斑の馬だ、赤い馬だといふ、そんな毛の色などは見なくても宜い、これは怒馬か駿馬かといふことだけを見て、駿馬だけ選り出して、あとは

駄馬の百圓や二百圓のものがあつても、それはそつちへやらうといふ風な大事なる所を日蓮聖人は行かうと考へて居られるのである。註釋學派みたいに「こつちの方が少し毛色が良い、怒馬だけれども色が綺麗だ、これでも五圓ぐらゐ値段が違ふ……」といふやうなことは日蓮聖人はやらぬのである。それはへつばこ學者が強いてさういふくだらない所に註釋を附けてゴト／＼やつたから、五大部の聯關して居る大精神といふものは隠れてしまつた。國が大事だと言つたら本佛の威徳を光揚することを忘れたり、又信仰が大事だといつて宗教の價值を認めた時分には國を嘲つて、超國家と言つて見たりする、それではいかぬ、五大部の思想をズツト聯關して見なければ日蓮主義の宣傳者としては卒業前の人間と謂はなければならぬ。さういふことが常に時分の腦裡には浮ぶのである。それは學風の相違である、自分の方の學風は玄黄を省略して駿逸を取るといふ、達意的と

いふか、総合的といふか、さういふ風な思想で一切
經も見、御遺文も見、あらゆる思想を見て居るので
ある。

本尊鈔には本尊に關することが現れて居るけれど
も、併しそれもやはり開目鈔に現れた絶対の人格者
を棄て、他に本尊がある譯ではない。それを別なも
のだと思つて、本尊鈔と開目鈔とは全然違ふやうに
思つて、古來研究して居る人が多いけれども、それ
は全部失敗である。斯様に安國論に説かれるやうな
法と國との關係、殊に愛國の精神、開目鈔に説かれ
るやうな主師親の三徳の宗教の本質たる絶対人格者
のこと、それから撰時鈔に説かれるやうな時と宗教
の應用に關すること、それから報恩鈔に説かれる報
恩の道徳、さうして本尊鈔に説かれる本尊の様式、
斯ういふ五つの事柄は皆合せて考へなければならぬ
ことであつて、一つを知つて他がわからぬやうなこ
とでは話にならぬ。故に五大部を聯繫してこれを研

とは出来ない。苟くも法華經を讀み題目を唱へ、日
蓮門下ちやと言ふに於ては、即ち吾々の絶対至尊敬
すべき主師親の三徳者は誰であるか。部分的には日
蓮聖人を主師親の人とすることがある。興門派あた
りはさういふことを言つて居るが、さういふことは
開目鈔それ自身に於て成立たないことである、又そ
れでは宗教の意味合が成立たない。彼等は末法には
日蓮聖人と言つたりするけれども、末法といふやう
な時に依つて、本佛釋尊は在世だけで、時が末法に
なつたら日蓮聖人がこれに代はるといふやうなこと
は意味を成さない。絶対の人格者といふものは時を
以て言へば古今を貫き處を以て言へば、全法界に亘
るもので、娑婆世界を中心にして盡十方法界に及び
時を以て言へば三世益物、過去は始め無く、未來は
常住不滅である。そんな所に像法だの末法だのと言
つて主師親の三徳者が在世は釋尊、末法は日蓮など
といふのは、皆學問の筋のわからぬごまかしもので

究して見たら宜からう、安國論を研究するには安國
論一つでなしに、餘の書物と併せて安國論を見、開
目鈔を研究するにも他の四つのもとの機關を執つて
見たら宜からうと思ふのである。仍て先づその大體
の標準をお話して見たい、一々細密に綜合し對照し
て残らずその文章を讀み合せるといふことは、暇の
ある人が緩くりやつたら宜からうと思ふので、茲に
はさういふ觀方の型を一つお話するのである。
先づ第一に開目鈔を中心にして現れて居る思想か
ら他の四大部を觀察して見ようと思ふ。開目鈔の最
初に

夫れ一切衆生の尊敬すべき者三あり、所謂主師
親これなり。(七四七)

と説かれた、これが日蓮聖人の宗教觀の極致である、
一番最初に言ひ現はされた言葉であるけれども、日
蓮教學をやる者はこれを忘れてはいかない、これが
わからないやうなことでは日蓮教學に入つて來るこ

ある。宗教の本質といふものは哲學的に考へなけれ
ばならぬので、そんな千年や二千年でヒョイ／＼變
つて來たりするやうなものではない、そんなものは
共に合せの語で問題にならぬ。けれども今の日蓮教
學者は多くそんな事を言つて居る、それは導師とい
ふ法を弘めに出て來る坊さんといふものは、五百年
で代はり、千年で代はるといふことはある、けれど
も信心するところの信仰の對象、本尊といふものは
そんな譯のものではない。さういふ事を言ふのは哲
學も學ばず、宗教學も學ばない者の言ふことであつ
て、それこそ所謂戲論である。弘法大師の言ふ通り
戲論、酔つばらひの寢言といふものである、學問で
はない。日蓮教學者がそんな事を言うて居るから、
何時まで経つてもこの結構な教を持つて居りながら
まごころして居る、淨土門に蹴飛ばされたり、耶蘇
教に蹴飛ばされたり、天理教に蹴飛ばされたりして
一向盛にならぬ、坊さんも大勢居るけれども皆横路

のつまらない所にばかり力を入れて居る。吾輩の主張するこの思想なら一遍に弘まるのである、それを邪魔ばかりして居る、せめて邪魔でもせぬければ宜いけれども、内輪から寄つて媚つて盛んに誹謗を加へて妨害して居る。さういふ事さへ彼等が止めればこの正しき思想は一遍に弘まるのである、今は悪口妨害に依つて正法といふものは抑壓されて居ると言つて差支ないのである。

左様な譯で開目鈔の主師親三徳といふことを目標に置いて日蓮教學者はやらなければならぬ。これは日蓮教學に限らぬ、日蓮聖人の議論から行けば一切の學問はそこにあるのである。即ち儒外内の習學すべき三徳といふものも、この主師親の三徳を明かにする爲に備へられて居るものに外ならぬといふ總標から、儒教に依れば主師親の三徳として斯ういふ人が出て来る、又婆羅門教に依れば斯ういふものが出て来る、佛教に於ても小乘、權大乘、蓮門、本門と

いふその教の眼鏡を通すといふと斯ういふものが出て来るが、最後壽量品の眼鏡を通すと、本當の絶對の主師親が出て来る、法華經の壽量品に於て顯し出されたその絶對の主師親のみが、それが本當の尊き方であるといふことを結論して居るのである。そこまで行かなければ所謂目が開いたのではない、だから壽量品を知らざる諸宗の學者等畜生に同じといふ激しい言葉まで出て居るのである。

夫れ一切衆生の尊敬すべき者三あり、所謂主師親これなり、又習學すべき物三あり、所謂儒外内これなり。(七四七頁)

といふ開目鈔の冒頭の言葉を能く頭腦に入れて、さうして發迹顯本に依つて眞の三徳者たる本佛が顯はれることをはつきり認めなければならぬ。

華嚴乃至般若大日經等は二乗作佛を隱すのみならず久遠實成を説きかくさせ給へり、此等の經に二つの失あり、一には行布を存するが故に

仍ほ未だ開權せずとて蓮門の一念三千をかくせり、二には始成を言ふが故に、曾て未だ發迹せずとて本門の久遠をかくせり、此等の二つの大法は一代の綱骨一切經の心髓なり。蓮門方便品は一念三千二乗作佛を説いて爾前二種の失一つを脱れたり、しかりといへどもいまだ發迹顯本せざれば實の一念三千もあらはれず、二乗作佛も定まらず、水中の月を見るがごとく根なし草の波の上に浮るに似たり。本門にいたりて始成正覺をやぶれば四教の果をやぶる、四教の果をやぶれば四教の因やぶれぬ、爾前蓮門の十界の因果を打破つて本門の十界の因果をとき顯はす此れ即ち本因本果の法門なり。(七六四頁)

といふ開目鈔の御文章はこれを詳しく研究する必要があるのである、これに達しなければ永久に日蓮教學といふものはわからぬものになる、これが心髓である。その中に於ても『發迹顯本せざれば實の一念

三千もあらはれず二乗作佛も定まらず』といふことがある、この發迹顯本といふことは、お釋迦様に就ての本當の尊さを明かにしなければならぬといふことである。法華經が善いとか何が善いとか、横路ばかり言うて居つて、釋尊に就てその顯本といふ絶對價値を觀なければ駄目ぢや。そのお釋迦様の壽命から言へば始め無く終り無く、御智慧に於ても、御慈悲に於ても御活動に於ても絶對である、そのはたらかれる範圍から言へば、娑婆世界を中心にして十方法界を貫くものである、それは壽量品に説かれて居る通りの事ナンであつて、壽量品の顯本の本佛を信じなければならぬ譯である。それをだん／＼論じて來て、

此の壽量の佛の天月しばらく影を大小の器に浮べ給ふを、諸宗の學者等近くは自宗に迷ひ、遠くは法華經の壽量品を知らず、水中の月に實の月の想ひをなし、或は入つて取らんとをもひ、

或は繩をつけて羈ごとどめんどす、天台の云く
天月を識らずして但だ池月を觀る。(七六五頁)

この語は誰にもわかる事である、天の月が水に影を宿すやうに、池にも映れば盥にもうつるやうに、壽量品の本佛がいろ／＼身を分け、名前が變つて現れても、一切の佛とか神とか有難さうな名に依つて現れて居るものも、皆この壽量品の本佛の天月が水に映るやうな譯のものだと説かれて居る。この意味を能く了解すれば宜いのである、「諸宗の學者等近くは自宗に迷ひ、遠くは法華經の壽量品を知らず、水中の月に實の月の想ひをなし、或は入つて取らんとすもひ、或は繩をつけて羈ごとどめんどす」……實に何とも言へない妙旨である、日蓮教學はそこだといふことにならなければ駄目である、「天月を識らずして但だ池月を觀る」と言つても何のことだかわからぬやうでは、永久に日蓮教學といふものは一歩も進むものではない。そこへ行くと鬼子母神が有難いと

か、帝釋が有難いとか、堀の内のお祖師様が有難いと言つて居るのは、皆この天月を知らないものであるから五十歩百歩である。樂師を拜んで居らうが、成田へ行つて居らうが、天月を識らざることに於て同じものである。それは盥に映つた月とか泥溝に映つた月である、盥の方が少し綺麗だといふばかりであつて、天月を識らぬといふ點に於ては皆同じものだといふことが日蓮教學上の見識である。日蓮聖人を有難く思はぬ人間ならば兎も角、日蓮聖人が命に換へて弘められた教ではないか。何も日蓮聖人は物好きに雪の中に閉じ籠められてジャン／＼ばつた譯ではない、大事な教を顯さなければならぬから「眞の事を言はざりと思つて弟子共に内々申す法門あり」と言つて開目鈔を説かれたのである。その大事な所を味はなければならぬ。
さうすると今申す通りに、天月の水に映るやうなものだといふ意味合、これを統一神的本佛と自分

は申して居るのであるが、これは哲學的に宗教の優劣を批判して行く上に大事な問題である。多神教はさうしても多神分裂といふことになるので、これは宗教學上認められないものである。ところが佛敎は多神敎になつて居る、澤山の佛様菩薩様が皆獨立して多神敎の弊害に陥つて居る、これが今日佛敎の振はざる所以である。私は觀音様……私はお地藏様……とやつて居るから、それでは到底宗教學上に於て價値が無いのである。それは醜業婦みたやうなもので、亭主といふものが決まつて居ない「お前の亭主は誰ぢや」それは納豆賣もあれば車挽もある、お爺さんもあれば息子もある……といふやうなことを言つたのでは、宗教といふものの、信念に全然價値を失つてしまふ、これは野蠻の標本である。

そこでそれに對して起るところのものが單一神敎と言つて、澤山の中から一つを探つて來る、だから阿彌陀様なら阿彌陀様に限るといつて、他を捨て、

しまふといふことになれば單一神敎といふものが出て來る。澤山佛あり神あることを認めるけれども、その中に於て都合上たゞ一つを探る「今は女房が娠娠して居るから子安の觀音様に絶つて行く」といふさうするとその間は觀音に對する單一神敎になつて居る。淨土宗などの阿彌陀様はやはりこの單一神敎である。
それからモウ一つは唯一神敎といふのである、これは宇宙に唯だ一人しか神はないといふので、基督敎がそれである。今までの宗教學ではこれが一番良いと想つて居つた、併し唯一神は少しも働いて出る應用といふことが出來ないから、一切の神佛を皆否定して掛る。さうしてそれが唯だ一切を否定するといふ理窟だけでなく、基礎が成立たない、宗教學上の基礎は汎神主義、従はざるを得ないのである。汎神主義といふのは、一切のものは皆平等にして絕對なものである、それであるから人間にも神となり佛

となる絶対性を有つといふことでなければならぬ。それを否定すると、神様は一人切りで、お前等は神にはなれない、天國に行つても掃除をしたり風呂番をしたりして居る傭人みたやうなものになつてしまふ、神様のお側に置いて貰ふといふだけではやはりそれは神でない、天國の傭人みたやうなものである。それが神になるといふことになれば唯一神教ではない、神が二人出来て来る、そこでそれは神にはなれぬと言はなければならぬから、どこ迄行つても基督教では上帝の僕と言つて居る、彼等の墓を見る、と皆「天帝の僕」と書いてある、僕といふのはしもべで、下男みたやうなものである。それは學問上から言つて許されないことである。佛教で言へば一切衆生悉有佛性である、哲學上から言つても皆その個々のものに絶対と一致するものがある、哲學の真理は一と多、即ち萬有相關の原理といふものがあつて、この宇宙玄妙の極處といふものは總てが同一價

値になる。であるから哲學上の真理から汎神主義でなければならぬ、唯一神教といふものは真理違反のものである、獨斷的のものである、斯ういふことで破壊される。

斯の如く唯一神教といふことは真理に違反するばかりでなく、實際上に於ても困る、それは自分が神になれない、宗教を信じて神になれない。何になるかといへば天帝の僕である、「それはチョット氣が利きませぬナ」といふことで、宗教上の希望といふものを満し得ないことになる。

又モウ一つは宗教に於て非常な排他性の害毒が起つて来る、神は一つであるから、日本に来ては日本の國のいろ／＼な神様を「そんなものは神ではない」と言はなければならぬ。お釋迦様でも、佛教徒が佛様だと言ふけれども、そんなものは佛ぢやない餘の者は皆罪の子だといふ中に入れてしまつて、皆基督に依つて贖罪されなければならぬと言ふ。だか

ら嚴格に言へば、お釋迦様でも天照大神様でも、皆頭から水を掛けて貰つて贖罪しない限りには、天國の僕にすらも進むことは出来ない理窟になつて来る。基督教は非常に優しい愛の教を説きながら、腹の内が嫉妬に満ちて居る、表面は猶撫聲の婆さんだけれども、どうかすると性の悪い鬼婆になるといふ態度が彼等の歴史に表現して居る所である。優しい事を説いたり、なか／＼親切でもあり、随分病人の世話をしたり、貧乏人の世話をしたり、停車場などでも重い靴でも提げて居ると「私が持つて上げませう」と言つたり、えらい優しいやうだけれども、愈々になると虐殺などをやる。さうして宗教の問題になつて来たならば、佛様などといふものが祀つてあると、非常にこれを憎み、敵視して、實に敵がそこに居るやうに思ふ、さういふ點に於て彼等は頑冥不靈である。若しも日本に於て基督教が勢力を得たならば、伊勢の大廟も焼いてしまふとか、お寺も焼い

てしまふとか、佛像などは泥溝に抛り込むといふやうなことをしなければ氣が済まぬ、非常なヒステリックの嫉妬の女房が暴れ出したやうなもので、えらい猫撫聲で優しいやうだけれども、一つ狂ふと直に火鉢を蹴飛ばしたりする、危ふない宗教である。それが唯一神教に伴ふところの、その根柢から流れて居るところの一つの病氣ナンである。

左様に真理にも合はないし、宗教の希望にも合はないし、宗教の融和性を欲し、又我國の國體にも合はないやうな、さういふ缺點が唯一神教にはある。それは日本人としてハッキリ知らなければならぬ、それは唯だ法華を信するから必要だといふのではない、日本人である以上は、常識としてその位の事は知つて居らなければならぬ、それが私の持論である。

そこで宗教の基礎は汎神主義であるから、佛様も神様も澤山出来る譯である、それはどうしても出来

なければならぬ、澤山のものが覺つて行くのであるから、幾らも出来る譯である。だから多神的になつて澤山の佛が出来る、汎神主義が基礎であるから佛敎でも三世諸佛といふものが出て来る。それを「イヤ佛は一人だ」と言つたならば基督教のやうなものが出来る。澤山の佛があることを認めて、さうしてその澤山の佛に統一を與へるといふことがなければならぬことになつて来る。統一といふことは澤山のものを纏りを附けて、一と多といふもの、關係を纏める。丁度人間の心は一つである、一つだけけれども、物を言うたり、手を動かしたり、飯も食つたり、跳ねたり、誦つたり、何でもする、一生の間四肢五官を働かしたる事柄といふものは千變萬化である、それは本も書けば、唄も歌へば、マラソン競争もやれば、柔道もやる。さういつた活動の末から見れば千變萬化測り知るべからざるものだけれども、心の根本に戻せば一つの統一がある、この統一が破れたら

狂人である。唯だ知らずにやつて居るといふのでは危ぶないが、承知してやつて居る「君は裸になつて居るが寒いではないか」寒いことは寒いけれども柔道をやるから風邪を引きはしない」といふことを知つてやつて居れば宜い、柔道もしないに寒中家の内に裸になつて坐つて居ればそれは狂人といふことになる。だから統一といふものがなければいかぬ、やることはどんなに變化して居つても、一つの精神系統の統一があつて、中樞の精神、最高指揮權の命令の下に活躍して居るといふことにならなければならぬ。

その通りに澤山の佛様があつてもその中樞を定めて、そこに統一といふものを見ない限りには、汎神主義の宗教に於てどうしても完全なる宗教は構成されない。唯だ一つこの統一神的思想に上つた時、宗教が完備するのである。然るに一切經の中に於て華嚴經、大日經、どこへ行つてもそれが無い、壽量

品に至つて始めてその統一神的思想を發揚せられるから、日蓮聖人が「一切經の中にこの壽量品なくんば人に神なきが如し」といふことを言はれて居る。その法華經の壽量品に依つて日蓮主義は成立つて居る。その壽量品の有難い「此處だ」といふことを忘れてしまつて、太鼓ばかりドンドコやつたらそれで法華ぢやといふのは潜越の沙汰である。斯ういふことを吾輩が何遍も言ふけれども、その宗旨の管長や學者といふ者が知らぬ顔をして横を向くといふのは、全體正義を愛せざるものである。吾輩は死んで行くから言うて置くけれども、餘りにだらしがなさ過ぎる。吾輩は永い間聲を噎らして今日まで統一神の宗教でなければならぬといふことを絶叫して居るのに、應答も何もしない、知らぬ顔をしてボカソとして居る、實に不都合極まるものである。これを鮮明にすることに於て日蓮聖人は心血を注がれたのである、開目鈔は即ち日蓮聖人の畢生の心

血を注がれて書かれたものである、開目鈔の爲の日蓮聖人である。開目鈔に書いてあることが破れたならば、日蓮聖人は智者に我が義を破られたならば日蓮は直に珠數を切ると言つて、何れの宗旨の人が來ても、公場對決に依つて百人千人の人が參つて議論しても、この佛敎の正義の矢表に立つ者はない、烙千に槌一つなるべし」といふことを日蓮聖人は信じて居つた。その善い所を發揚し宣傳して行くのが法統を繼ぐ者の當然のことである。併し昔はなかなか開目鈔の斯ういふ點が能くわからなかつた、又解釋する坊さんも少かつたのでまご／＼して居つたけれども、今日は海に明瞭になつて來て居る。元の遺文録で言へば二の卷の二十四枚目の前後の所が最も大事な所である、(前に擧げた)この文章は繰返し／＼拜讀して讀んじて置かなければならぬ。我宗では引導を渡す時でもこの御遺文を讀むのであるから生きて居る間に能く覺えて置かないと、死んでから

「能く聴け」と言はれてもわかりはしない、發迹顯本せざれば實の一念三千もあらはれず、さあどうちや……生きて居る時さへわからぬのだから、死んだら尙更わからぬ、それでは逆も助からぬといふことになるから、どうしてもこれは本氣でやらなければならぬ。自分の知つて居る在家の研究に熱心なる人達は、この開目鈔の一節に掛つて何日も徹夜して研究したといふことを聞いて居る、今の宗學會の小林大僧正の如きも、所謂眞枝日蓮といふ人から開目鈔の講義を聴いて、七日七夜寝なかつたといふことを話をして居つたが、今日諸君が日蓮教學を熱心に研究するといふならば、餘計な所ばかりぐづぐづやらないで大事な所をバツと掴まなければならぬ。又他の坊さん達の研究も餘計なことをほじくつて永いこと學問しても、そこがわからなければ卒業免状などやるべきものではない。

そこでこの精神からして、今申す通り汎神主義のつ具へなければならぬから、その本佛性を吾々に具へる。それはどういふ尊きものかといふ時に、壽量品の顯本の本佛があつて始めて吾々にある佛性の尊さがわかる。だから本佛が顯れぬければ「根無し草の波の上に浮ぶるに似たり」といふことがそこにあらるのである「發迹顯本せざれば二乗作佛も定まらずである。又壽量品に至つて始成正覺を破れば四教の果をやぶる、四教の果をやぶれば四教の因やぶれぬ、爾前迹門の十界の因果を打破る、一切の因果組織が本佛の有ると無いとでまゐるで變つてしまふ譯である。その一つの本佛顯本に依つて十界の因果、一念三千悉く變化するといふ所を會得して、始めてそれが日蓮教學、顯本教學といふことになる、發迹顯本の一事、一切の教學の死命を執して居る最高標準である。それに達せなければ駄目である、秘傳、口傳といふやうなことを言つて、つまらない書附みたやうなものを貰つて見たところが、この開目鈔に於

大真理が法華經は方便品に依つて現れ、開佛知見の文に依つて一切衆生、悉く佛性有りといふことが明かになり、壽量品に於て統一神佛の本佛を顯したところ、この二つに依つて世界のあらゆる思想、あらゆる宗教といふものは法華經に統一されざるを得ないのである。太鼓の音に統一するナンといふことは出来ることではない、太鼓の音よりモツと善いものがある／＼ある、西洋の樂器の方が宜いかも知れぬ、西洋にも太鼓はあるから態々こつちから持つて行かないでも宜い。どうしても法華經壽量品の本佛と、併せては方便品の佛性論であるが、併ながら方便品の佛性論も壽量品に來なければ浮草のやうなものである。それは何かといふと、佛性論のその佛の性を具へて居るといふ、その佛といふ見本が無くなつてしまふ。それが即ち壽量品の本佛でないといふと、偽佛であつたならば、佛性と言つてもその佛の性が偽佛性になつてしまふ、本佛性といふものをモウ一

て今言ふ通り「發迹顯本せざれば云々」の一節が綱めなければ、口傳も秘傳もありはしない。さうするとその統一の本佛は總ての中心である、絶對であるといふことはわかつたけれども、どういふ様式、どういふ相で在らせられるかといふことを明かにしないと、信行の對象にならない、所謂主師親といふ人格者にならぬ。唯だ一切の中心であると言へば、大日如來のやうな唯だ大きな相もわからぬやうなものに行きたがる、そこに亦人間の弱點がある。一切の根本とか全體とか言へば非常に大きなつて、奈良の大佛様のやうなものになつてしまふ、終ひには相もわからぬ。耶蘇教の神でもやはりさうである、神は在まざる所なしと言ふ、その在まざる所なしといふことの爲に、形もなく色もないといふことになつて、空氣か水蒸氣みたやうなものになつてしまふ。さうすると有難いといふことは人間の情意から消えてしまふ、何と説明してもそこらに

ある煙みたやうなものを有難がる者は無い。阿彌陀様も無礙光如来不可思議光如来であると言つて、光の相にて在しますといふのであるから、何處から来たかわからぬが、唯バツと光つたといふサーチライトみたいなので、光だけあつて相は見えなくなつてしまふ。それではいかぬからその絶対本佛に今度は具體的の人格を説明しなければならぬ、それが開目鈔に續いて出て居る。

諸大乘經に法身の無始無終はどけども應身報身の顯本はどかれず。
即ち「諸大乘經に法身の無始無終はどけども」といふのは、今言ふサーチライトみたやうな佛は説くけれども、具體的の相の美しいところの佛は無い。それを壽量品に於てのみ「應身報身の顯本」と申して、洵に美しい相もあり、優しい心もある、尊き覺を有つて居るところの心もあり相もある所謂人格完備の佛が顯れる、その佛が絶対である。

來であるといふ直接の語は、提婆品にある所の

微妙の淨き法身相を具すること三十二
といふ彼の龍女の讚佛偈が即ちその的文ではあるけれども、義理は今の我此土安穩の本國土妙の文に依つて、本佛の莊嚴法身であるといふことを證明するのである。それが莊嚴法身で在らせられるから、吾々が靈山往詣の場合も、その尊き佛様にお目に懸つて「あら嬉しや」といふ情意を満足せしむることが出来る、日蓮聖人が

柔軟の御すがた見奉るべきをも未だ見奉らず
(補遺四七三)

その優しい御相を拜したいものであると仰せられたそれはこの應身報身の顯本といふ哲學上の基礎が無いといふと、その柔軟の御相といふやうな信行上の歡喜に結びくことが出来ないのである。それからお經の方でも序に主師親のことを申して置かなければならぬが、その絶対の主師親が釋尊で

この意味合——總てを統一するといふ絶対といふこと、さうして絶対の人格相好を有するといふことの關係が、哲學上の非常に大きな問題である。眞理だけの絶対は直ぐ説けるけれども、美の絶対といふものはなか／＼説き切れないのである。壽量品はそれを能く説かれたのである、名前は釋迦様であるが、その本體は絶対である、さうして尊き美しき姿であるといふことがある。壽量品の方に於てはその相は佛に就ては説いてないけれども、その佛の居られる世界の方に就て美しき相が説いてある。

我この土は安穩にして、天人常に充滿せり、園林諸の堂閣、種々の寶をもつて莊嚴せり、寶樹花果多くして衆生の遊樂する所なり。
斯ういふ美の淨土を説いて、その淨土の主人公が本佛釋尊で在らせられるといふのであるから、その莊嚴の淨土に依つて莊嚴の佛が在ますといふことが能く表はされて居るのである。さうしてその莊嚴の如

あるといふことの文的は、譬喻品の「今此三界」の文である。それは發迹顯本して用ひれば何處にあつても壽量品の經意と同じことになるのであるから、「壽量品に曰く今此三界」と日蓮聖人が御遺文の中にも書かれて居るのである。譬喻品の時の程度の意味でなくして、壽量品の意味に燒き直してさうして用ひる譯である。併しその「今此三界」の文を借りて來なければ、壽量品にさういふことがないのかと言へばさうではない、義理は完全にあるが、あゝいふ風に纏つた文句としての整齊つたものは譬喻品の方が宜いから言ふのである。その主師親の意味合は壽量品に「我娑婆世界」といふことを盛んに説いて居る、或は「常在靈鷲山」とあつて、常にこの靈鷲山、或は娑婆世界に佛はお在でになる、それは即ち吾々の教主——主人で在らせられる。それから師匠であるといふことは説法教化といふことが到る處にある、「常説法教化無數億衆生」と言ひ、或は「隨

應處可度、爲說種種法」即ち度すべき處に隨つて爲されるどころのお師匠様だといふことは今度ばかりではない、始め無き以前より未來までも何時の場合でも、吾々が間違つて迷へば、何時でも最後はお釋迦様の手に依つて救はれるのである。阿彌陀様に依るのでもなければお地藏様に依るのでもない、そんなものは變つて行つてしまふ、さういふ言葉も無くなつてしまふかも知れぬ。けれども本佛のみは永久の存在者であつて、若しもやり損へば又その救濟のお手に掛るのである。それから親であるといふこともお自我偈に「我亦爲世父」——「我も亦これ世の父」と仰せられるし、壽量品の長行の方には醫者の譬喩があつて、父といふことが澤山出て居る。「此の子慈むべし」とあるから、壽量品の中に主師親の三徳の文は歴然としてある譯である。壽量品を了解すると言うたら、釋尊の主師親に感激するより外な

い譯である。「是好良藥を今留めて此に在く」と言うたら、その良藥が有難い、その使が有難いと思ひ込んでしまふけれども、その留め置くといふことも、使を遣はすといふことも、皆釋尊の濟度の御力用である。藥と言ふたら藥に引掛つたり、使と言ふたら使に引つ掛つたりするのは文句に囚はれ過ぎるのであつて、その本は本佛の絕對の活動の上から出た言葉である。使を遣はすといふことも藥にして服ますといふことも、皆衆生濟度の大力用、無限の大活躍の中にあるのである。愈々となれば使にも依らず、又さういふ良藥といふ教にも依らずして、精神から精神に感孚することもある。愈々その人の心に直接感應を起さんとする時に於ては、吾々が眠つて居る間に心の中に佛の大慈大悲が徹底することもあるだらうし、聲や聲に生れて何事も見聞くことの出來ない場合又吾々が畜生が如何に墮込んだ時に於ては、東京の街に生れて居る狎ノロは、日本にどんな歴史

があるといふやうなことは知らない、片瀬の龍口寺に飼はれて居る猫は、日蓮聖人が頭の座に坐つたといふことよりも、隣りの親爺が持つて來て呉れる鯛の頭の方が宜い、さういふ場合でも本佛釋尊の大慈大悲は常に吾々衆生を徹底して救ふどころの無限の力があるといふことを考へて、そこから有難い觀念を有たないと、本佛の感應感激といふことがわからなくなつてしまふ。基督教の全智全能といふ方がズツと善くなつてしまふ。併し本佛も一々言はなくてもごんな事でも出來ぬことはない、全智全能である絶對であるから、さういふ小々な事を吝くさく言うて、藥を醫者から持つて行つたらその使の方が大事で、藥を拵へる時分にはお醫者が有難いけれども、使に渡せば使と藥で、お醫者は要らないといふやうな議論をやつて居る、あゝいふことは皆俗學といふものである。宗教の本質は全智全能、無限のものであるから、吾々が耳が聾になつてしまつて教を

聽くことが出來なければ、直接その心の中に感孚感激を與へて下さる譯である。それは何とも言ひやうの無い有難いことである、吾々は釋尊の出現に依つて一切經を遺され、日蓮聖人の出現に依つて、その本旨を明かにされたといふことに依つて、さういふ教を通し、さういふ偉人の出現を通して吾々が宗教的の覺醒に向ふといふことが一番善いことであるから、その途をお執り下されたのである。どれもこれも皆本佛の智慧なり慈悲なりから現れたところの御力用である。さう考へて感謝感激の精神を本佛に對して懐いて行かなければならない譯である。

その本佛が全智全能であるといふ所に徹底しない限りには日蓮教學といふものは成立つものではない。お自我偈が有難いとか、日蓮聖人が有難いとか、法華經が有難いとか、何が有難いとか、そんな事はかり言うて、本佛の活ける大人格者のその御心の慈悲大悲の奥に徹底しないといふやうな教の立て方は駄

目である、そんな事は説明を聴かなくても駄目だといふことはわかつて居る。宗教といふものは精神的感應にある、親子の關係で言うたならば、親の子を思ふどころのその大慈悲の御心のその熱烈なる動きと、子の親に感激して有難いと思ふところのその感恩感激の心と結付く所、そこが最も親子關係の微妙絶對なものである。君臣の關係で言へば、我が皇室の大御心を以て即ち民を思ふこと子の如し、丁度明治天皇が自分のお子様が病氣の時に、朕は自分の子でもさう一々考へて居れない、大勢の日本人を皆自分の子だと思つて心配して居る、自分の産んだ子が可愛くないことはないけれども、それは醫者に委して置くより仕方がないと仰しやつた、あの御心の慈悲の精神と、それから乃木將軍のやうに家も子も皆忘れてさうして大君の爲に盡さうといふ殉忠至誠の心、それが日本道德の生命である、餘は附けたりである。日蓮聖人のえらいのも、その本佛に對す

る絶對の感激を生命として大活躍をやつた所に、日蓮聖人の價値があるのである、それを除つたならば乃木將軍が明治天皇を忘れてしまつたやうなものがある。日蓮聖人の有難いのは本佛に感孚感激した熱誠があつて、そこに尊さがあるのである。世間の國民道德や何かの方ではその事が直ぐわかる譯である。然るに法華經の教學の方でそれがわからぬといふのは、日蓮教學がまだ夜が明けて居らぬと言はなければならぬ。國體の方でも御維新前はさういふことがわからなかつた、徳川氏が跋扈して居つて、朱子學みたやうなものが跋扈して、その點をこまかして、ハッキリとやつてはいかぬから、いろ／＼國體の尊嚴を蔽ふやうなことをやつて居つた。それが一たび王政復古して以來今日になつては、さういふ皇室の尊嚴を國民道德の根本に置くといふことに就ては誰も異論はない。日蓮教學に於ても、吾輩が絶叫するこの本佛釋尊の絶對の慈悲に感激する

より外ないものだといふことに到達する日が必ずや來たる。今まで派が分れて居つて御經の讀方など議論して居たが、そんな事は、枝葉の問題である。本當の法華經の大精神に歸り、日蓮聖人の大御心に復つて、さうして日本乃至一國浮提に法華經の廣宣流布を圖らなければならぬ、それは覺醒たる僧俗に依つて爲されなければならぬことである。

つて來たりして本佛釋尊を忘れて居るけれども、學問の上に於ては壽量品を講ずる時分に、天台大師は文句に於ても又玄義に於ても釋尊の絶對價値を説いて居る、その點で許されて居る。事實は天台の寺院の本尊といふものは今でも淺草の觀音とか、不忍池の辨天といふやうなものである、上野の寛永寺は何を本尊にして居るか、本尊が無い譯でもあるまいけれども、わけがわからぬ。さういふやうな譯で天台

それからこの主師親の三徳が法華經の大精神で、日蓮聖人がそれを開目鈔に現はされたといふことは今のお經文と開目鈔とを合せて能くわかつた譯であるが、モウ一度開目鈔でその點を證明するならば、下の卷に於て本尊のことを説かれた點であつて、天台宗より外の諸宗は本尊に惑へり。(七九一)といふことを書かれて居る、此處では天台を許して居られるやうだけれども、これは天台大師が壽量品の講義に於て釋尊の尊嚴を十分に説いて居る。宗旨の實際には樂師如來を持つて來たり、或は觀音を持

といふものは實に墮落して居るが、それは寺院が墮落して居るので、學問の上に於ては天台大師はなかく立派に釋尊の感徳を光揚せられて居る。開目鈔ではその點を許して説明されて居る、その以下に來ていろ／＼な宗旨が釋尊の絶對を知らないことに於てこれを論ぜられて居る點である。本尊というてもいろ／＼枝葉の問題ではない、釋尊中心の思想、さうしてその釋尊に對する絶對の信頼といふものを缺けば、それが本尊に迷ふといふことになる譯であ

る。今の日蓮門下でも釋尊を認めないことに於ては即ち本尊に迷うて居るといふことになる譯である、一通り有難く思ふならば、佛教各宗釋尊を馬鹿にするといふものは無い、一通りは皆有難く思つて居るけれども、本當の尊さを知らない所に間違ひがあるのである。小乗の宗旨も釋尊を本尊にして居るけれども、それは軽く考へて居る。丁度皇太子の位にある人が、自分のお父さんを民、百姓だと考へて居るやうなものであると日蓮聖人は言はれて居る。それは何を意味するかと言へば、釋尊は天皇の如きものであるのに、その子たるものがお父さんは百姓だと思ふやうな観方になつて居る。

さういふ風な論を立て、來て、大乘の宗旨に於ても法相宗は自分の親を漸く侍ぐらるに考へて居る華嚴宗、真言宗になると自分のお父さんを貶して他人をお父さんだと思ふやうなことになつて來た。元はさうではなかつた、華嚴でも釋尊が大きいことは

なことを言つて居るから、それを日蓮聖人が攻撃したのである。或は禪宗は自分がえらいやうに思つて成上り者が親を馬鹿にするやうに、佛をさげ經を下す、何れにしてもさういふものは本當に父の尊さを知らなかつた、だから

壽量品をしらざる諸宗の者は畜生に同じ、不知恩の者なり。(七九二頁)

と斷言された、この點は非常に大事なことである、壽量品に於て釋尊の絕對、その尊さのこの上もないといふことを徹底的に意識することに於て、始めてそれが佛法であると日蓮聖人は仰しやるのである。この一節「壽量品をしらざる諸宗の者は畜生に同じ不知恩の者なり」といふことは、諸宗に限らない。縱ひ壽量品を讀むと雖も、壽量品の本佛を以て父としないといふことになつたならば何にもならない。お自我佛は何處でも讀んで居る、鬼子母神の前でも「每自作是念」……毎に自らは是の念を作す、俺は何

知つて居つたのであるけれども、少し間違つて盧遮那佛といふものは釋尊ではないかの如き考を持つて來た。さうして弘法が華嚴宗から出て真言宗へと變つた時に於ては、モウ大日如來といふものがお釋迦様の向ふを張つて、これが偉い佛だ、お釋迦様などは小さいものだと言ひ、さうしてその次に覺鑊といふものが出て、釋迦などは大日如來に對して履を取ること出來ない、草履取にもなれない、さういふ無茶な事を言ふやうになつて來た。淨土宗は又少し變つて、今の單一神教的に阿彌陀如來を取つてお釋迦様を捨て、しまふ、有難いと思つてはいかぬと言ふ、チヨツと有難いやうなことを演説や何かで言ひ居るけれども、それは道行で言ふので、終ひまで有難いと思つてはいかぬといふことになつて居る。それは難行難修を振捨て、と言つて、釋尊が有難いと思ふことはそれは讃歎難行である、阿彌陀如來より外の佛が有難いと思つてはいかぬ。そんなやう

時でもお前の事を心配して居ると言つても、鬼子母神はそんなものは知らぬといふ譯である。これは唯だお經といふものを捧讀みにして居るから意味がわからないのであんな事をやるのであるけれども、お經の意味がわかつたならば實に狂人みたやうな話である。「自我得佛來」といふのは「我佛を得てよりこのかた」と言つて、釋尊が仰しやることである、それを鬼子母神の前に來て「自我得佛來」……何を言ひ居るのかわからぬ。さういふことは今までの無教育な何もわからぬ時代の宗教としては宜いけれども、これから教育を受けて行く者が、そんな事を坊主が教へて濟む譯のものではない。濟まなくなつてから兜を脱いでも間に合はぬ、早く脱いで置かぬとこの間までさういふ事をやつて居つた奴は駄目だといふことになるから、世間が餘り氣附かない中に坊主の方から改めて掛らないと、世間で氣が附いた時分には、坊主が改めようと思つても、間に合はない

放り出されてしまふ、それはさうなるにきまつて居る。これからだん／＼暖かくなつて櫻の花が咲くのと同じやうなもので、どうしても世の中は教育の進歩に依つて、お自我傷は斯ういふ意味であるといふことを知らずに「自我得佛來」……とやる者はだん／＼減つて来る。それを自覺しないのは實に愚なことであるけれども、彼等の安心は何處に置いて居るかと言へば、「自分達が死んで行く迄の間にはまだそこ迄は來ないだらう、死んで行つてしまへば後は野となれ山となれ、その間自分が食ふに困りさへしなければそれで我が願足れり」斯ういふ考でやつて居るのであるから、世間の人々はその積りで考へて居らなければならぬ。「どうでせう、私等が生きて居る間に食へぬやうになりませうか」といふことだけが大問題なのである。「まだ／＼世の中は馬鹿が多いから、あなたが一生懸命汗を掻いて言うても、まだ私共の食へぬやうにはなりませんよ……」そこに

僅に望を翫して居るに過ぎないのである。どうか左様な淺ましい事をやめて、本尊と言つたらお釋迦様の尊い所に感激して行かなければならぬそれが様式に於て曼荼羅で現れて來ようが、二尊四士の木像に現れて來ようが、そんな事は第二段の寫象式と言つて、本尊を形に現はす方法である。形に現はさずして、吾々の心とその實在の方との結びきといふものは、さう澤山のものを列べて、さうして一々に頭を低げるのではない、唯だ一つの統一神の絕對本佛の大慈大悲と、我が一つの純潔なる信念とが結びきるのである。書いたり象に現したりするから澤山列べるけれども、例へば旅行でもして汽車の中で信心する時には、そこに大黒さんを列べたり、鬼子母神を列べたりしなくても宜い、自分の一つの信念と絕對無上の本佛の靈光とに依つて、その間の聲が南無妙法蓮華經として現れて居る。それは何も向ふに文字を描くのではない、本佛釋尊の大慈大悲

に感孚して南無妙法蓮華經と唱へて居るのである。どうしてそれがわからぬか、それがわからぬで日蓮教學をやつて居る人は實に氣の毒な者である、そこまで徹底して手を拍つて「成程」といふことに於て始めて法華の相續者と言へるのである。そこまで脱けて出ない間は八幡の藪の内をまごついて居るのである、まだ熱心が無いのである。そこまで行かすして息がつけるといふのは、日蓮教學に徹底しようといふ願行の足らない人間である。そこで開目鈔のさういふ意味は無論明瞭になつて居るのであるが、それを以て今度他の四つの御書を見ると、同じやうにそれがやはりその他の御書の大なる主張になつて居る譯である。(次續)

x x x x x

末法の佛教

會費 拾貳錢 七拾貳錢 壹圓四拾四錢
一ヶ月 半ヶ月 一ヶ月
送料共 同 同

末法の佛教は大聖人の御魂の叫のそのまゝです。この叫びにお互は覺醒し精進して眞の生の喜と幸福を味ひませう。
 この意に於て皆様に末法の佛教を御勤めします。
 一、大聖人御遺文を毎月發行するのです。
 一、文体は全部かなが付て居ります。
 一、難解の文には略註がありませす。
 一、毎號聖蹟か聖傳か聖筆の寫眞が入れてあります。
 一、實費で御分ちするのです。
 一、見本御入用の方は金十錢封入御申込み下さい

東京淺草清嶋町 統閣圖書部
 東京四谷南寺町法恩寺 御遺文普及部
 東京神田三崎町二ノ二 興振社

知法思國會大會記事

風に随つて波の大小あり、薪によつて火の高下あり乃至根
 深ければ枝繁し、源遠ければ流長し、と 大聖は仰せられ
 てゐる、久遠劫來の流を酌む地涌く菩薩達から組織された知
 法思國會は昨夏、思想界の趨勢に鑑むる處あつて 大僧正本
 多日生統下唱導のもとに志士仁人の正定聚結成を見つゝ而か
 も猶ほ滿を持して放たず慎重隱忍を加へ動ざること泰山の
 やうであつたが、機が熟したか埋然として今回左の通り大會
 を開催され、今後益正攻法を採られる。

日時 五月十七日午後六時開會
 會場 有樂町 朝日講堂

- 最初に創立大會が嚴修された
- 一、開會の辭趣意書朗讀 理 柴田 一能氏
 - 一、宣 言朗讀 理 本多 日生氏
 - 一、祝 辭演說 文部省宗教局長 下村 壽一氏
 - 一、同 朗讀 日蓮宗管長 酒井 日慎氏
 - 一、同 同 顯本法華宗管長 井村 日成氏
 - 一、同 同 法華宗前管長 藤平 日學氏
 - 一、同 同 國社會總裁 田中 智學氏
 - 一、祝 電 披 露 特別會員 宮原 六郎氏
 - 一、披 露 特別會員 佐藤梅太郎氏

滿堂水をうつた靜肅に、時々おこる拍手の響、千人は一つの
 心に結ばれ莊嚴の裡に式は滞りなく済んで五分間休憩の後に
 教化大講演會が始まつた。

- 一、開會の辭 理 井上道太郎氏
 - 一、教化に就ての希望 理 本多 日生氏
 - 一、國民の誇 特別會員、陸軍中將 井上 一次氏
 - 一、時局對應の教化 顧問、海軍中將 佐藤鐵太郎氏
 - 一、國家興亡の分岐點 特別會員 小林 一郎氏
 - 一、祝 辭 教化團體聯合會理事 松井 茂氏
 - 一、國難旺盛の時代 理 加藤 文雄氏
 - 一、閉會の辭 理 事 伊東竹三郎氏
 - 一、萬歳三唱 顧問 矢野 茂氏
- 會場の名もさし昇る朝日講堂であり、場所も有樂町といふ何
 となく一種の暗示を與へられてゐるやうである、新聞社の方
 では講演ばかりで人を集むるに就て相當懸念してゐた様子で
 あつたが、さて定刻に到るや數百の聽衆は見へた。時間は正
 確にしたい、殊に當夜の差定が四時間制限の範圍で完了する
 には随分忙がしい譯であるから、來衆の多寡に拘らず幕は開
 かれた、七時即ち講演が始まる時分にはさしも千人以上收容
 力ある大講堂も滿員で通路に佇む人も五人十人ではない、之
 を目撃した幹部の者は先づ欣喜の涙がにじむ。正義を愛する
 人は決して少なくはない、此千人が眞に我等の綱領を賛同せ

られて一人が三人宛の護法愛國の仲間を勧誘されたならば日
 ならずして三千の同志を獲、其三千人が又同様に努力する、
 このやうにそれからそれへと勇猛精進すれば、今日の思想國
 難の大惡は醇厚和會の大善果を來たすに難くない、累卵の危
 急から躍進して大磐石の安らかさにおくべき全責任を吾人は
 双肩に荷負されてゐる、鋼鐵の血管と金剛の意氣に溢るる同
 志は猛然として起つ時が來た、各講師の熱誠なる快辯に身も
 時も所も忘れて、異體同心の實現、堅き決心の色が總ての人
 の眉宇に現はれた森嚴さ！ 進軍の双鼓はドマン々々と高
 鳴し響渡つてゐる、やがて急最後は近づく二千の手は之
 を援助すべく急散の喝采と續いて和する 聖上陛下萬歳の百
 雷は既にある凱旋時の壯觀を直感して悉く感謝しつゝ散會し
 た。當夜の講演はいづれ紙上に發表すべく、差當り本月の
 「教」には 本多親下の教化に就ての希望が掲載出來たのは
 歡ばしい事である。左に祝辭の二三を掲げて参加出來なかつ
 た各位の御清覽に供する事にしたい。

茲に知法思國會創立大會ヲ舉行セラルルニ臨ミ一言ノ祝辭
 ヲ述ブルコトヲ得ルハ日慎ノ欣幸トスル所タリ
 惟フニ現時我國思想界ノ混亂ニ鑑ミ國家ノ前途ヲ憂フルノ
 士亦タ未ダ必ズシモ少シトセズ、然レドモ之ガ源委ヲ尋ネ
 テ其嚮フ所ヲ知ラシムルモノ果シテ幾バクカアル、宗祖宣

タ法ヲ知り國ヲ思フ、法ハ體ナリ國ハ影ナリ、體曲レバ影
 斜ナリト、蓋シ其意本ヲ究メ末ヲ治ムルニ在リ、末カ究メ
 ズンバアルベカラズ本カ究メズンバアルベカラズ、知法思
 國會ノ創立セラレタル所以ノ意亦タ此ニ在ルカ其ノ憂國ノ
 至情ノ敬仰スベキト同時ニ其ノ理想ノ甚大ナル定ニ現代ノ
 指針ニシテ祖猷ヲ辱メザル者ト謂フベカラズヤ、
 嗚呼學國一致新ノ最大ノ一善ニ歸センカ、獨リ我國家ノ慶
 福タルノミナラズ、娑婆即寂光ノ事成亦タ期スベキナリ、
 本會ノ創立定ニ意義深廣ト謂フベシ
 茲ニ聊カ所感ヲ述ベテ祝辭ト爲スト云爾
 昭和四年五月十七日
 日蓮宗管長 酒井 日慎

凡ソ國運ノ隆替ハ明教ノ興廢ニ因リ民族存立ノ價值ハ文化
 ノ高下ニ依テ定マル、從テ國家ハ明教ヲ盛ニシ民族ハ理想
 的文化ノ建設ニ努ムベシ、明教ト云ヒ文化ト云フモ他ナシ
 開顯ノ趣旨ニ準據シ綜合觀察以テ諸般ノ思潮ヲ調整シ本佛
 國慈ノ統一ヲ歸着トスベシ、是即チ理想的文化建設ノ根幹
 タリ、而シテ我天業民族ハ肇國ノ始ヨリ日ヲ以テ理想ノ象
 徴トス是レ我ガ民族ガ理想的文化ノ建設ヲ己ガ使命トスル
 ノ謂ニシテ聖日蓮ノ「日ハ東ヨリ出デテ西ヲ照ラス」ノ聖
 語夫レ是ヲ道破セルモノニアラズヤ、願テ我國近時ノ狀

勢ヲ規ルニ民心矯激ニ馳リ奢侈風ヲナシ道義類レテ私利是事トシ政治、教育、經濟、宗教等人事百般ニ互リテ時弊百出シ國歩險難多クシテ理想ノ彼岸路甚ダ遠キヲ覺ユ、此ノ時此際理想的文化ヲ興隆シ徳教ヲ炳ニシテ民心ヲ善導シ時弊ヲ矯メテ百姓昭明六合徳化以テ邦家ノ理想實現ニ邁進スルハ識者ノ任ニシテ亦日蓮教徒ノ使命タリ、今知法思國ノ道友相結ンデ會ヲ興シ此ノ任ヲ果サントスルヲ聞キ不肯欣快ニ不堪、聊カ蕪辭ヲ連ネテ茲ニ祝意ヲ表ス

昭和四年五月十七日

顯本法華宗管長 井村 日成

今ヤ思想國難ノ危機ニ際會シテ茲ニ知法思國會ノ創立ヲ見ル、聖祖門下ノ編素 立正大師ノ遺命ヲ奉戴シテ異體同心ノ目的ニ向テ邁進セバ百事何ノ成セサルコトアルヘキ、若シ夫レ本會ノ活動ニヨリテ内門下ノ結合統一ヲ促進シ、外國民思想ノ善導教化ニ資シ以テ法國冥合ノ理想ノ一端ヲモ實現スル事ヲ得ハ吾人ノ歡喜何物カ之ニ過キンヤ

爰ニ本日ノ盛會ニ臨ミ聊カ蕪辭ヲ連ネテ以テ祝辭ニ換フ

昭和四年五月十七日

法華宗前管長大僧正 藤 平 日學

知法思國ハ本化開導ノ起點ナリ、知法ニヨリテ立正シ、思國

ニヨリテ安國ス、故ニ知法思國ヲ以テ慈悲ノ發ト爲シ、立正安國ヲ以テ慈悲ノ果ト爲ス。經ニ知佛所說經因緣及次第ト云フ、ア、知ノ一字ソノ來ルコト遠ク且ツ遠シ、聖祖之ニ依テ五知判ヲ立ツ、其義確タリ又經ニ端坐思實相ト云フ、端坐ハ法華三昧ナリ、聖祖久遠ノ大闢ヲ闢テ三三秘法法國感應ノ調理ヲ示シ、一念三千本有實相ノ要ヲ訣シテ本門戒壇國土成佛ノ大義ヲ建立ス、思國ノ至レルモノナリ。深く知り篤ク思フ、三慧兼備リ四悉齊シク施シテ本利益妙ノ聖化昭々乎トシテ萬世ヲ照ス。方今世態日ニ混濁ヲ滋シ、人心歲月ト共ニ荒頽シ、國難内外ニ紛來シテ頗ル世網ノ危殆ヲ感スルノ時、本化ノ正見コノ開ヲ除カズンバ一代ノ倒懸解クニ由ナカラシ

茲ニ本多日生師等ノ著宿大家、猛然起テ知法思國會ヲ興立シ本化門下應時益物ノ大化ヲ皇張シ時難ヲ救ハントス。善イ哉企圖、法ノ詮ヲ得タリ時ノ可ニ中セリ。

願クハ本化同門ノ清衆、異體同心ヲ空文字トセズ、各々小情ヲ去リ小執ヲ脱レテ勇猛精進シ、知法思國ノ大忠ヲ揮テ二陣三陣ノ顯動ヲ建テコンコトヲ、是ヲ祝辭ト爲ス

昭和四年五月十七日

田 中 智 學 敬白

○清明會講演會

馬込町財團法人清明會が、會の事業の一としての清明文庫も宮原氏多大なる努力のもとに昨秋其工事が完成し、又清明講座も五月中旬から開催され着々其理想實現に精進されてゐる、こうした如來使が都下に散在することは眞に力強き感を催す次第で、さきに 秩父宮殿下 高松宮殿下の臺臨を忝ふせし同會が、其文庫講堂完成後最初の公開講演會を、去る四月二十八日、日蓮聖人御開宗聖日「法華三聖謝恩」の講演會に蓋を開けた。當日は恰も日曜日、加ふるに快晴に恵まれて都人士の塵埃を避けて洗足の靈地に遊ぶ者極めて多く、招かずして集る求道者は叫然として講堂を埋め、この種の講演會としては稀有の盛會であつた。

先づ同會理事宮原六郎氏は、「本會の事業と法華經」の題下に氏の熱烈なる信仰が、遂にこの大事業を完成せしむるに至つた経過と、妙教信受の切々たる信仰から自他共に積徳成佛の悲願成就を誓願せられ、次で文學士小林一郎氏が、「日本文化と法華經」の關係に就て、繰々時餘に亘つて講演され就中上宮太子を中心とした奈良朝文化と及びその後の絢爛たる日本文化が悉く法華經を契機として成果せられた歴史的事證を擧げて我文化と法華經の不離一體の關係を詳述せられ、法華經の未來使命を明して深き感銘と鋭き反省とを與へて降

壇せらる。次で大僧正本多日生親下は「法華三聖の功蹟」と題し、聖徳太子、傳教大師、立正大師の三聖、各々時を異にし所を分ちて法華經を色讀身讀遊ばされ、その文化史上乃至宗教史に遺されし未曾有の偉大なる功を讃仰し、末法僧俗の猛省を促がし、謝恩の實は今後の名題として殘されてあると近來の熱辯に定刻を過ぐるこ四十分以上、既に薄暮六時に講演を終り、親下の發聲のもとに聽衆和同して 天皇陛下の萬歳を唱へ靈氣堂に満ちて散會。

この講演會によつて教へらるゝ所は極めて多かつた。即ち主權者たる宮原氏が實業家であつて、一優婆塞に過ぎない言はゞ素人と云ふべき人、殊に會場は足場の悪い洗足池畔であつた、然もこのすがすがしい會の空氣が近付き易く、入り易きものとして大衆の足を吸ひ、隨つて盛會の實況は皆に日曜日のたまたまとは速断し難いものがある。氏の職業離れのした純粋なる信受の實踐家として火の如き信仰と「我と共に人にも功德を積んで貰ひ、人と共に我亦成佛せん」として、未知の隣人を共に同じき行者たらしめんとする大衆的な行き方が時人に投じた一證左である、行き詰れる布教界に示されたよき教材であつた、免も角多くの意味に於て意義深き講演會が實地に催された。

翌廿九日 聖上陛下御大禮後第一回の天長の佳節を迎へ、國民上下雲龍も共に、聖壽無窮を禱り今日の佳き日を壽ぎ奉

つた。そこで清明會は亦引續き「天長節奉祝講演會」を催し「天長の佳節を賀し奉る」宮原六郎氏に始まり、會する人多くは前日の來會者であつたことは殊に主催者を感じせしめ陸續として集る赤子引きも切らず、講堂は溢れてヴェランダから階段までも埋める始末、病氣を携へて出演された田中智學氏「昭和の精神」の題下に二時間以上も熱辯を振はれ、控室で附添の明治會員、「健康を害されては」とハラ／＼し主催者に降壇を勧めてくれと氣をもまれる麗しさ。終つて深作安文博士「我が國体に就て」の講演あり六時頃漸く會を終了し、宮原氏の發聲にて「陛下の萬歳を三唱して、散會。瑞唱爲めに落日をとむるが如く、池面に麗明として輝き、赤子の赤誠を喜みして靜かに西山を越えた。

大日本立正會 開堂式記事
小松川會館

昨年暮より建築工事に着手し万金の淨財をば主として市川町の小澤氏等共局に當り、小松川の鈴木、櫻井氏等亦熱誠に努力し、中澤氏等乃至小澤工場一黨結縁等奉つて賛助し、小西師和賀師等法演激勵する所ありて幸に豫定通り本館の完成を見るに到り、去五月一日其開堂供養の式典が度修せられた。折柄の雨中にも不拘淨信の士女參會其數二百六十餘名に達し六十四疊の御寶前も狭く覺へた。午后二時司會者山田義

一氏開會の辭に始まり、本多日生親下大導師の下に鈴木日雄權大僧正、小西日善僧都を双臨に、梶木、和賀、山口、鈴木、田口、高矢等の諸師参加せられ一同之に和し極めて莊嚴なる開堂式であつた。(祝下の慶讚文末尾の如し)祝辭として統一團顯本宗學會、日暮里鐵仰會、笠塚立正會、橫濱法悅協會等及び各地よりの祝電朗讀あつて式を終へ、夫れより會員代表片山辯護士の祝辭演説あり、次で小澤元重氏の事業經過及び會計報告あり、小憩後、本多親下は「國民教化と法華經」と題し我國の文明は聖德太子が法華經を中心にして此佛教と神道儒教の三教融合に依り千數百年経て來たものである、然るに明治の時に始めて法華經を顯揚したが爲めに、今日のかやうな思想を現出したのである、これは一日も早く懺悔し法華經に來ねばどうしても救へまい。法華經を採用すれば非常に深い思想が起り、歐米諸國の文明をば取捨し開顯統一する事が出来る、今上の御即位勅語には唯、人心教化の事をば仰せられた。

朕内ハ則チ教化ヲ醇厚ニシ愈民心ノ和會ヲ致シ益國運ノ隆昌ヲ進メンコトヲ念ヒ、

七千萬の國民は皆此 勅語の思召を知らねばならぬ、そして是を實現する事に努力するが第一である。夫は要するに教化を醇厚にせねば國の隆昌はないと仰せられてゐる。教化は間に合せではいけない、一度與へたものは何處々々までも役立

慶 讚 文

つ様に初めは少し骨が折れてもそれは一度精神を決定すれば子孫にも傳へて譲らぬものでなくばならぬ、其本格のものとは一は深味に於て覆がへらぬものの即ち根柢が深く打込んであるものであり、今一つは麗まりを要するので、西洋文明は淺薄であり、斷見常見が解らず、又因果應報も信じない、靈魂の永遠存在と業を信ぜねば天下は滔々として惡化する、是を救ふべき良藥は法華經の一丸である。といふ意味で一時間餘に涉つて整然たる妙辯を以て講堂に慈雨をふらされ一同驚喜し感激に燃えた。次で主任小西師の答辭として、第一淨舍建立を讚歎し、第二沿革に就き、第三誓願と分類されて熱誠なる師子吼があつた。それより紀念扇子の贈呈と開釋に移り散會せるは午後七時頃であつた。

謹奉勸請法華經中常住ノ三寶護法護國ノ諸天善神來臨影壽知見照覽アラセタマエ

本日茲ニ開堂式ヲ舉行スル大日本立正會小松川支部ハ佛教ノ本旨ニ依リ衆生教化ノ大事ヲ行ハントスルニアリ我等衆生ハ現在生活ニハ人生ノ煩悶懊惱ニ苦ミ未來生活ニハ業因ノ教ニ惡道流轉ノ苦ニ沈ム此ノ現在ニハ眞ノ幸福ヲ得テ死後ニ永遠ノ悟ニ登ラント欲セバ佛教ヲ尊信シテ安住ノ地ニ立ツヲ要ス而シテ佛教ノ中ニ於テ法華經ハ最第一ノ正法ニシテ現當二世ニ悉地成就ヲ與フ我等末代ニ生レテ此ノ大法ニ遭遇スルハ眞ニ首龜ノ浮木ニ値フヨリモ珍ラシ然ルヲ此小松川會館ニ於テ今後正法輪ヲ轉ジ衆生教化ノ大事ヲ行ハントス此ノ近傍ノ人々ハ喜ビ勇ンデ此法緣ニ因ツテ廣大無邊ノ勝益ニ浴センコトヲ茲ニ開館式ニ當リ所思ヲ陳ベテ慶讚ノ意ヲ表ス

時昭和四年五月一日

大僧正 本多 日生

稽首々々

東京統一團本部教戦録

△五月五日(第一日曜日)午後一時開會、例に依り先づ法要次で講演會に移る「法華經の正憶念」本多日生現下來會者九十餘名

△五月十四日(午後一時開會)地明會例會、當日は會員土居けん子姉が暫らく獨逸へ行かれる事に成つたに就て午前十一時から土居姉の爲に心許りの送別會を開きました

△三月十二日午後一時より例會修法後遺文講義龍井特命布教師 △同二十七日午後七時より例會修法後遺文講義龍井本光師 △四月十二日午後一時より修法後遺文講義龍井本光師

神戸布教誌

△三月十二日午後一時より例會修法後遺文講義龍井特命布教師 △同二十七日午後七時より例會修法後遺文講義龍井本光師 △四月十二日午後一時より修法後遺文講義龍井本光師

中國教報

○四月十日佐伯北小學校にて志士の遺鏡を省みて直原講師、紳人生建設のために中山 ○十五日婦人會の教戦同前 ○十六日女子青年團講話同前 ○廿日檜原宅にて教戦同前

普明院様の御命日に相當して居ましたので御供養に御菓子を下さいました、來會者八十余名同五時半散會

△五月十九日(第三日曜日)午後一時半開會、法要に次で本多現下の「阿含と法華」の講話あり來會者八十余名、因に當日は本多日生現下を最も崇拜して居る支那公使秘書官の権氏が來臨され閉會後も時間の許す限り相ひ語り現下今夕關西御遊教にお發ちになるので同四時半なごり惜しくも散會した

△五月二十六日(第四日曜日)午後一時半開會「信仰復活の魂」中村清一「現世利益」伊東竹三郎「國破れて山河あり」若本博士「所感」山口智光「一大事」和賀義見師等

廿三日改宗式田高にて教戦同前 ○廿九日開演村婦人會女子青年團春季總會小學校にて講演休庵の妙用貞森教壇講師、農村育兒の保護に就て岡本校長、人生如何に生べきか中山賢勇 ○五月一日消防式後魂の消防化同前 同夜同信會教戦同前 已上

金澤教報

△家庭講話 四月六日本多町黒田宅にて佛子の生活龍仁一十師 △佛教次郎氏 四月八日本光寺にて正義の信仰本郷常次郎氏△精神生活 四月十日立正園にて精神生活の栖住富元會榮師 △常樂會四月十五日日本覺寺にて生命の問題を解決せよ富元會榮師 △思想講話 四月十五日日本化傳道團正義の宗教本郷常次郎氏△佛教講話 四月二十日立正寺にて正き佛教の流れを掲げ富元會榮師 △學生講話 四月二十日四高講堂にて佛教信仰の原龍仁一十師 △信仰講話 四月二十二日本長寺にて如來眞實の教龍仁一十師 △家庭講話 四月二十三日本竹村宅にて鐵に生きし日々龍仁一十師 △日蓮主義講話 四月二十五日立正園日蓮上人の信仰及修養思想本郷常次郎氏 △天晴會 四月二十六日本長寺にて佛教統一の原理龍仁一十師 △家庭講話 四月二十九日河合氏宅空中にブラ下つた男龍仁一十師

廣島法戦録

往昔から眞宗王國とまで稱されてゐる安藝

なお葬式を営まれました、因に同夫人は御主人と共に妙經寺四恩教林の創立者でありますから教林葬として矢野茂園下が委員長と成つてお申ひ申し上げた譯です。(楓木報)

名古屋教報 (四月分)

四月五日夜開目鈔講義會教化會館 原田日勇
八日夜婦人會長者獅子教化會館 原田日勇
十五日夜開目抄講義會教化會館 原田日勇
廿五日零時半豊田機織會社 本多大僧正
午後新川工場 本多大僧正
廿五日夜新愛知新聞社化粧品組合本多大僧正
廿六日午前十時菊井紡績 本多大僧正
午後日本車輪會社 本多大僧正
廿六日午後一時半澤田工場 原田日勇
二十七日夜公開講演會教化會館 本多大僧正
法華經の正憶念 本多大僧正
廿七日午前十一時廿分豊田本社 本多大僧正
同午後三時三十分東洋紡績會社 本多大僧正

大阪教報

四月三日相馬宅にて決定無有疑義龍井特命布教師、七日蓮成寺にて友廣龍馬氏の改宗式を奉り開演統一の教壇先師、八日尊尊出雲の第一義京師師、十一日室町寺にて、多羅羅信京師師當樂我淨上田師、二十二日現實と理想の調和京師師、二十三日蓮成寺にて婦人會日蓮聖人の慈國本多現下同夜大絃俱樂部にて國民思想と法華經本多現下、二十六日森本宅にて七寶莊嚴の身京師師、二十九日市立方根山病院にて日蓮聖人の信仰京師師、五月七日天下茶屋中央俱樂部にて開會の時松木氏正義の教に來れ白部師思想國難と日蓮聖人京師師

國語會

○國語會 元且廣島本願寺に於いて、教徒元且の覺悟紀野俊輔師 ○國語會 元且五時教會に於いて、新春を迎へて吾人の覺悟山岡俊輔師 ○家庭講話 九日廣島下柳町世良氏宅にて、家庭生活と信仰紀野俊輔師 ○國語會 十二日廣島妙法寺に於いて、午後一時より女性觀山岡俊輔師、主観の改造島田憲一師、三時半より妙法婦人會、立正蓮光會聯合にて新年宴會を開く、余興として若井社中の琴の演奏あり ○本願婦人會新年宴會 十三日午後二時より廣島本願寺に於いて、婦人の使命山岡俊輔師信仰の躍動紀野俊輔師 終つて宴會に移る、余興として伊藤社中の琴尺八の合奏あり ○日蓮主義講話 十三日夜七時吳教會に於いて、不退の精進山岡俊輔師、考へ方を變へよ島田憲一師、佛法の推新、紀野俊輔師 ○純信會 十六日宇品町に於いて、一月例會を開く本佛の使命と日蓮聖人、紀野俊輔師 ○立正蓮光會 二十六日夜廣島妙法寺に於いて、一月例會を開く、強く生きるの道島田憲一師 ○日蓮主義講話 二十八日夜廣島本願寺に於いて、來苦を認めて、島田憲一師、人生航路指

○家庭講話 九日夜廣島下柳町世良氏宅に於いて、家庭生活の妙諦野俊輝師 ○本照婦人會 十三日夜廣島本照寺に於いて二月例會を開く、蓮華比丘尼の死野俊輝師 ○日蓮主義講話 十三日夜廣島會に於いて、日蓮聖人の大意 山岡俊顯師 ○釋尊涅槃會 十五日廣島妙詠寺に於いて修法す、涅槃の意義島田憲一師 ○宗祖降誕會 十六日夜廣島妙詠寺に於いて修法す、日蓮聖人生れざりば紀野俊輝師、日蓮聖人の御主張原田憲一師 ○純信會講話 十六日夜宇品町に於いて二月例會を開く、法華經講義(其一) ○立正蓮光會 二十三日夜廣島妙詠寺に於いて二月例會を開く、日本共產黨事件の真相と吾人の覺悟原田憲一師 ○日什大正師御正會 二十八日夜廣島本照寺に於いて修法す、日什大正師の主張島田憲一師

○家庭講話 九日夜廣島下柳町世良氏宅に於いて、家庭生活の妙諦野俊輝師 ○妙詠婦人會 十二日夜廣島妙詠寺に於いて三月例會を開く、日蓮聖人の高德山岡俊顯師 ○本照婦人會 十三日夜廣島本照寺に於いて三月例會を開く、信の威力山岡俊顯師 ○日蓮主義講話 十三日夜廣島會に於いて、鎌倉時代を顧みて山岡俊顯師 ○釋尊涅槃會並宗祖降誕會 十五日夜廣島會に於いて修法す、御聖日を迎

へ奉りて、山岡俊顯師 ○純信會 十六日夜宇品町に於いて三月例會を開く、法華經講義(其二) ○春季彼岸會 十八日夜廣島本照寺に於いて、六方禮經を拜して紀野俊輝師 ○春季彼岸會 十八日夜廣島妙詠寺に於いて此岸より彼岸へ島田憲一師 ○春季彼岸會講話 十九日夜廣島本照寺に於いて、逆境の思慮京藤義應師 ○春季彼岸會講話 第二日 十九日夜廣島妙詠寺に於いて、現代思想と日蓮主義(其一)京藤義應師 ○春季彼岸會講話 第三日 二十日夜廣島本照寺に於いて、心の財第一也京藤義應師 ○春季彼岸會講話 第三日 二十日夜廣島妙詠寺に於いて、現代思想と日蓮主義(其二)京藤義應師 ○春季彼岸會講話 第四日 二十一日午前十時より、廣島本照寺に於いて修法す、信仰の徳の力京藤義應師 ○春季彼岸會講話 第五日 二十一日午後一時より廣島妙詠寺に於いて修法す、現代思想と日蓮主義(其三)京藤義應師 ○春季大講演會 二十一日夜廣島會に於いて公開す、開會の辭山岡俊顯師、彼の聲に俱に進まん島田憲一師、正しき人生の見方野俊輝師、現代世相と日蓮主義京藤義應師 ○今井坂一氏送別御講 二十三日夜廣島會に於いて、送別のことば山岡俊顯師 ○春季彼岸會講話 二十四日夜廣島會に於いて修法す、佛子の自覺山岡俊顯師 ○純信會涅槃會 二十五日夜廣島宇品町に於いて修法す、方便涅槃 紀野俊輝師

○加藤清正映畫會 七日より十一日間迄五日間吳教會主催、吳日日新聞社廣島毎日新聞社吳日蓮宗寺院三ヶ寺後援の下に吳市春日座に於いて開演す、觀衆計二千余名、又教育映畫として吳市各小學放兒童約一万一千名の來觀あり頗る盛會 ○お花見會 十二日午後一時より廣島妙詠寺に於いて立正蓮光會並妙詠婦人會聯合にて開く、折悪く天候不良なりしも共に歡を盡して五時散會す ○ラヂオ宗教講演日本放送協會中國支部の依頼により十二日午後六時三十分より廣島放送局にて放送す、近代人の生活と正統信仰(其一)島田憲一師 ○ラヂオ宗教講演 十三日午後六時三十分より前夜の續きを廣島放送局にて放送す、近代人の生活と正統信仰(其二)島田憲一師 ○本照婦人會 十三日夜廣島本照寺に於いて四月例會を開く、他山の石紀野俊輝師、信の力杉田常岐師 ○日蓮主義講話 十三日夜廣島會に於いて四月例會を開く、日蓮聖人の孝道親山岡俊顯師 ○家庭講話 二十五日夜廣島段原町栗原氏宅に於いて、衆苦充滿の世界島田憲一師 ○立正蓮光會 二十七日夜廣島妙詠寺に於いて四月例會を開く、立教開宗の實義島田憲一師 ○立教開宗會 二十八日夜廣島本照寺に於いて修法す、日蓮によりて日本國の有無はあるべし島田憲一師、旭ヶ森開宗の眞意義紀野俊輝師 ○開宗會 二十八日朝日の登らんとする時吳教會に於いて修法す、往時の旭ヶ森を偲びて山岡俊顯師 (島田憲一)

社寺建築及臺灣檜材の安價提供
設計監督

(三年以上水蓄乾燥材)

當所は社寺建築改善の目的を以て臺灣總督府及内務文部兩省の了解の下に臺灣檜材の安價提供及工事の設計又は監督の御依頼に應じ可申候間工事の大小に拘らず左記御便宜の個所へ御相談被下度候
追て設計規程並に目安表又は臺灣檜木質見本等御入用の向は御申越次第呈上仕候

(充分なる水蓄乾燥をなしたる檜材最も優良なるも水蓄不
充分なる檜材は干割狂ひ等の缺陷多きものであります)

東京市四谷區霞ヶ関町十六番地
(明治神宮外苑内日本青年館正門前)

社寺工務所

(電話青山六〇二八番)

神奈川縣 鶴見町

社寺工務所鶴見支所

福岡市外堅箱町馬出松原

社寺工務所福岡支所

(電話二二三〇番)

大阪市西區市岡町七十九番地

社寺工務所大阪支所

(電話西三三二四番)

- 臺灣檜材の六大大特徴
- 一、耐久防腐
 - 二、蟻害絶無
 - 三、香氣清楚
 - 四、木質堅緻
 - 五、理整然木
 - 六、木高稚包

統一價定

一冊	金 貳拾錢	送料五厘
半冊	金 壹圓貳拾錢	送料共
一ヶ年	金 貳圓貳拾錢	送料共
一ヶ月	金 貳圓貳拾錢	送料共
一ヶ日	金 貳圓貳拾錢	送料共
一ヶ時	金 貳圓貳拾錢	送料共
一ヶ分	金 貳圓貳拾錢	送料共
一ヶ秒	金 貳圓貳拾錢	送料共

統一廣告料

表紙一頁	金 貳拾圓
一頁	金 拾圓
半頁	金 五圓
四分一頁	金 三圓
五分一頁	金 二圓
十分一頁	金 一圓
二十分一頁	金 五角
五分一頁	金 二角
十分一頁	金 一角

昭和四年五月廿四日印刷
昭和四年六月一日發行
行 (第四百十一號)

不許複製

編輯兼發行人 小林順義
印刷所 東京府荏原郡品川町南品川百八十一番地
電話高輪六〇二四番

發行所 統一發行所
東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
電話高輪五一〇七一番

編輯事務ハ發行所ニテ取扱フ

目次

次

- 感憤興起……………本多日生
祖書五大部の綜合觀(其二)……………本多日生
天風三萬里紀行(其一)……………小林日種
記事……………
○知法思國會第七回懇談會 ○同會教化大講演會 ○野口上人海外巡錫
各地教報……………

第三十四年七月號

統一

